

少子高齢化時代の地域ネットワーク :多参画社会の構築と人材育成 III

少子高齢化時代の地域ネットワーク：多参画社会の構築と人材養成（Ⅲ）

－ひとり暮らし・夫婦世帯の高齢者に焦点をあてて－

流石ゆり子（代表：看護学部）

小野 興子（副代表：人間福祉学部）

林正健二、村松照美、河野由乃、郷洋子、藤巻尚美（看護学部）

横山貴美子、城戸裕子、伊藤健次（人間福祉学部）

波木井昇（国際政策学部）

目 次

序	1
I. はじめに（研究の背景と目的）	3
II. 研究の方法と手順	5
III. 結果及び考察	
〈研究目的①〉	
1. 対象地区の概況	
1) A 町（過疎地）	8
2) B 市（市街地）	9
2. 対象の背景	
1) A 町（過疎地）	10
2) B 市（市街地）	11
3. ひとり暮らし・夫婦世帯高齢者の現在および今後の生活に対する思い	
1) A 町（過疎地）	12
2) B 市（市街地）	20
〈研究目的②〉	
1. 高齢者支援組織との交流会実施状況	
1) A 町（過疎地）	32
2) B 市（市街地）	43
2. 人口過疎地および市街地における高齢者支援ネットワークの現状と課題	
1) A 町（過疎地）	56
2) B 市（市街地）	60
IV. まとめ	64
謝辞	68
引用・参考文献	
付録・資料	
1. 研究依頼文	
2. 高齢者支援組織交流会ちらし	
3. 写真	

序

今日、わが国の大学には積極的な地域への関与・地域との交流が求められており、地域貢献が少ない大学は生き残りが困難とさえいわれている。平成 17 年 4 月、山梨県立大学が設立された際、大学の地域貢献を推進していくために、大学と地域を結ぶ大学内の組織として、地域研究交流センター（以下、センター）が設置された。

センターが行う地域貢献活動としては、地域研究の推進のほか、地域と連携したプロジェクトの推進、市民向けの学習講座の実施、まちづくりなどの地域活動等への支援がある。この中でも、地域研究の推進は、参加する教員数や予算等の面から見て、センターの最も重要な活動のひとつといえることができる。

センターが取り組む地域研究には、少子高齢化、多文化共生、中心市街地活性化、環境保全、農業振興をはじめとして、地域が抱えるさまざまな課題や問題に関するものと、地域の貴重な文化遺産の発掘、保存、伝承や県民の誇りとなる地域文化の創造につながるものがある。研究実施に際しては、学内 3 学部の教員の参加を募るとともに、県民、NPO、企業、自治体等と連携し実施しており、その成果を政策提言とともに地域に発信している。センターでの地域研究は平成 17 年度、18 年度、19 年度にそれぞれ 4 件、10 件、10 件に上る。これらの研究のうち、3 件は平成 17 年度から 19 年度まで継続して実施されており、「少子高齢化時代の地域ネットワーク」研究も、そのひとつである。

センターが「少子高齢化時代の地域ネットワーク」を地域研究のテーマとして採り上げた理由は二つある。

一つには、山梨では高齢化比率の上昇に見られるように、近年、少子高齢化が急激に進展しており、年齢や性別、障害の有無を問わず、だれでもが地域の構成員として力を発揮して地域を支えていく必要に迫られており、そのための方策の提示が喫緊の課題になっていることである。

二つには、山梨県立大学には人間福祉学部、看護学部、国際政策学部があり、介護や看護についての専門家が多いことに加え、企業活動や政策面の研究者もおり、「少子高齢化時代の地域ネットワーク」について研究していくことにより、大学としての特色を出すことが出来ると考えられたことである。

以下では、平成 17 年度と 18 年度の「少子高齢化時代の地域ネットワーク」研究について簡単に触れておきたい。

平成 17 年度には、山梨において少子高齢化が進展する中で、地域保健福祉行政の現状、医療福祉に関わる専門職の研修システムの現状、医療保健福祉の地域ネットワークの取り組みの現状について調査研究を行った。この結果、改正介護保険法や障害者自立支援法の準備を進めつつ、利用者への最大限のサービス提供のために、地域保健福祉行政・医療福祉に関わる専門職・医療保健福祉の地域ネットワークのそれぞれの努力が重ねられてはい

るものの、今後はそれぞれの枠を超えて、住民、保健医療福祉関係者、行政の三者が一体となって如何に取り組んでゆくか、市町村等地域毎のネットワークの必要性が示唆された。

次いで、平成 18 年度には、平成 17 年度の研究結果をふまえ、喫緊性の高い高齢者支援に焦点を当て、まだ十分に把握されていない県内の高齢者・家族等のピアグループ、NPO・市民団体等の自助組織の現状調査、さらに高齢者福祉企業団体等の状況調査を通して、本県における高齢者の保健・医療・福祉に関わるネットワーク化推進について検討した。このために以下を行った。

- ・高齢者支援に関わる NPO 等の支援団体等へのアンケート調査及び聞き取り調査
- ・高齢者福祉関連企業の代表者との情報交換会の開催
- ・高齢者支援に精力的な活動を展開している NPO 法人の代表者を講師とする公開研究会の開催

この結果、県内では NPO 等の団体によって、相応の高齢者支援活動が行われてはいるものの、1つの NPO では不可能な活動も、NPO 関係者同士が運営や活動についてのノウハウを相互に交換し合うことで、高齢者支援活動が広がる可能性があることから、NPO 法人同士のネットワーク化の重要性が指摘された。また、高齢者介護関連企業と医療法人・福祉法人等間でネットワークを形成することにより、より効率的できめ細かな高齢者支援サービスが可能になることが明らかになった。さらに、支え合いの連鎖は、NPO 参加者の多さではなく、構成員一人一人の感性から始まる、などの実践情報を得た。

これらを踏まえ、次ページ以降で述べる今年度研究に取り組んだ。

山梨県立大学では、「少子高齢化時代の地域ネットワーク」研究における取り組みに見られるように、大学の教員が地域に入り、地域の方々との交流や情報交換を通じ、地域の状況を把握し、地域の問題・課題を専門的立場から分析し、今後の対応策を考察し、地域に発信していくことを非常に重要と考えている。今後もこのような姿勢で地域の問題・課題に取り組んでまいりたいので、引き続き、ご支援ご協力をお願い申し上げます。

担当者：

流石ゆり子（代表：看護学部）

小野 興子（副代表：人間福祉学部）

林正健二、村松照美、河野由乃、郷洋子、藤巻尚美（看護学部）

横山貴美子、城戸裕子、伊藤健次（人間福祉学部）

波木井昇（国際政策学部）

I. 緒言（本研究における問題と目的）

近年、人口の急速な高齢化により高齢者人口割合は年々増加している。戦後生まれのいわゆる“団塊の世代”が65歳以上になりきる2015年までの高齢者人口割合はさらに急増することが見込まれており、2015年の高齢化率は26%、中でも75歳以上の後期高齢化率は12.5%と推計されている¹⁾。後期高齢者では、その健康特性から、現在健康であっても些細なことが原因で要介護の状態に陥りやすく、また認知症発生率も高くなる。

一方、わが国では、核家族化、少子化、女性の社会進出、未婚率や離婚率の上昇、および配偶者との死別後でも子どもと同居しない者の増加などにより、ひとり暮らしや夫婦のみで暮らす高齢者が増加している。そしてその割合は今後大きく伸びることが見込まれている。高齢者人口に占めるひとり暮らし高齢者の割合は、1980年には11.2%だったものが、1990年14.7%、2000年17.9%、2010年20.8%、2015年には21.2%となり、その10年後の2025年には22.5%のピークに達すると推計されている²⁾。これらの傾向は、大都市圏で特に顕著であるが、本県においても同様の傾向にあり、65歳以上高齢者に対するひとり暮らし高齢者の割合は漸増傾向にあり、平成10年度の8.9から平成18年度には11.7に増加している³⁾。ひとり暮らしで話し相手がいない高齢者では閉じこもりやうつ病などの虚弱化が課題である。

また先に述べたような理由で、わが国の65歳以上高齢者の子どもとの同居率は低下傾向にあり、高齢者夫婦世帯も増加している。わが国の夫婦のみ世帯に属する高齢者は、1980年には19.6%だったものが、1990年25.7%、2000年33.1%、2004年には36.0%となり、その割合は上昇傾向にある⁴⁾。本県においても同様で、総世帯数に対する65歳以上の高齢者夫婦世帯割合は、2000年度の6.7から2006年度の7.8に増加している⁵⁾。高齢者夫婦世帯では、高齢の配偶者が要介護状態の配偶者を在宅で介護する、いわゆる“老老介護”の状態になる可能性は高く、周囲からの支援を必要とする対象でもある。したがって、ひとり暮らし・夫婦世帯の高齢者が、住み慣れたまちで、その人らしく満足した生活を送るためには、支援システムのネットワーク化が不可欠である。しかも、市街地と農山村地域で生活する高齢者の生活ニーズはそれぞれ異なるため、両者の特性を考慮した地域ネットワークの構築が求められる。

当プロジェクトでは、平成17年度より「少子高齢化時代の地域ネットワーク」をテーマに研究に取り組んできた。初年度は、本県における地域保健福祉行政の現状把握と、それにかかわる専門職能団体の活動の現状及び保健・医療・福祉の地域ネットワークを構成している3団体の現状を明らかにした。翌平成18年度は、高齢者支援に焦点を当て、本県のNPO団体、関連企業の現状を把握するとともに、全国で先進的取り組みをしている高齢者支援ネットワークの代表者を招いた公開研究会を開催し、ネットワーク化のための示唆を得た。

そこで、本年度は2年間の研究成果をふまえ、①ひとり暮らし・夫婦世帯高齢者の生活

実態ならびに、現在および今後の生活に対する当事者である高齢者の思いを明らかにするとともに、②これらの高齢者の生活を、地域でさまざまな側面から支援しているインフォーマルコミュニティサポート（「認知症の人と家族の会」、老人クラブ、ボランティアグループ、所属サークル、高齢者関連企業、近隣など）およびフォーマルコミュニティサポート（地域包括支援センター、市町村保健師、社会福祉協議会、民生委員、介護保険サービス事業所、福祉施設など）組織との交流会を開催することにより、高齢者支援をめぐる現状を明らかにする。①②の結果をふまえ、③高齢者が、住み慣れたまちで安心して暮らし続けることを可能にするため、市街地の課題を明らかにするおよび農山村地域におけるひとり暮らし・夫婦世帯の高齢者支援ネットワークを構築することを目的とした。

Ⅱ. 研究の方法と手順

1. 研究対象

1) <研究目的①>

Y県内の地域包括支援センターで把握している 75 歳以上のひとり暮らしおよび夫婦世帯の高齢者（夫婦いずれかが 75 歳以上）で、かつ日常生活が自立し日常会話が可能な者。各 10 名（延 20 名程度）

なお、対象者の選定にあたっては、上記 2 箇所の地域包括支援センターの保健師に研究対象となる候補者の選定を依頼し、本人の了解をもって最終的な対象者とする。

地域包括支援センターは、Y県内の中心市街地および農山村地域（高齢化率の高い人口過疎の町村）の両者より各々 1 箇所を選定する。

2) <研究目的②>

市街地および農山村地域での『高齢者支援交流会』を開催し、そこに参加したフォーマル・インフォーマルコミュニティサポート組織メンバーのうち、研究協力の得られた者とする。

なお、本研究では、市街地および農山村地域の高齢者支援ネットワークの構築を最終目的とするため、両者の課題が明確になるよう交流会を開催する。

2. データ収集の方法

1) <研究目的①>

研究協力に同意の得られた高齢者個々に、インタビューガイドに基づき半構造化面接を行ないテープに録音（本人の承諾を得た上で実施）し、対象者の表情や態度、研究者が感じ取ったことなどを補記しながら逐語録を作成した。面接回数は 1～2 回、1 回の面接時間はひとり 50～60 分程度とした。

<インタビューガイド>

- ・現在の生活状況
- ・現在の生活に対する思い
- ・現在の生活における安心や不安、困っていること、希望 など
- ・必要な（あったらいいなと思う）サービス
- ・市町村行政への要望 など

2) <研究目的②>

交流会のテーマである「高齢者支援をめぐる現状と課題」について、『高齢者支援交流会』参加者同士の意見交換の状況をテープに録音（本人の承諾を得た上で実施）し、逐語録を作成する。

3. 分析方法

1) <研究目的①>

個別事例毎に録音したテープから逐語録を作成し、質的に分析した。逐語録をくり返して読み、ひとり暮らし・夫婦世帯高齢者の現在の生活状況ならびに現在および今後の生活に対する思い、安心や不安、困っていることなどが表現されている部分を中心に抽出した。その後、一行見出しを作成し、ラベル拡げ、ラベル集め、表札づくりを行った。さらに、最も抽象度の高い表札群を、その表札の内容が意味の上で最もわかりやすい相互関係の配置となるよう空間配置し、表札間の関連づけを行い、これをもとに図解化し、文章化した。

2) <研究目的②>

『高齢者支援交流会』の状況を録音したテープから作成した逐語録を何回も読み返し、上記研究目的①同様、目的に沿って分析した。

4. 研究期間

平成 19 年 6 月～平成 20 年 3 月

5. 倫理的配慮

1) 対象となる人への人権の擁護

- ・テープへの録音はあらかじめ対象者本人の同意を得てから実施し、データの保管に留意し、研究終了後は、速やかにかつ確実に破棄する。
- ・個人が特定されないよう個人名でなく符号化して表示し、匿名性を確保する。
- ・研究への参加は自由意思での参加であり、途中中断も保障する。
- ・研究に対する意見や疑問がある場合の連絡先を研究依頼書に明記する。

2) 対象となる人の理解を求め同意を得る方法

- ・対象者を管轄している地域包括支援センター長に研究の趣旨を文書および口頭で説明し、承諾を得る。承諾が得られた後、対象者の状況を熟知している保健師に候補者の選定を依頼する。
- ・候補者個々に研究の趣旨を文書および口頭で分かりやすく説明し、本人の同意書の提出をもって研究対象者とする。

3) 対象者の利益と不利益への配慮

- ・対象者（<研究目的①>）は 75 歳以上の後期高齢者のため、長時間の時間的拘束は身体疲労を増強する。さらに、対象者の生活の場での調査のため、調査時間帯や面接時間によっては生活リズムを乱す可能性も考えられるので、十分配慮する。

- ・ インタビュー内容が現在の生活状況や生活に対する思いなど、個人の生活に踏み込んだ内容を含むため、答えたくない場合は答えなくてもよいことを伝える。
- ・ 研究終了後、地域包括支援センターおよび対象者に研究成果を報告し、地域での高齢者支援ネットワークの構築に還元する。

6. 本研究の地域貢献

本研究では、75歳以上の後期高齢者で何らかの理由により現在ひとり暮らしまたは高齢者夫婦のみで生活している高齢者を対象としている。これらの対象者は、些細なことがきっかけで寝たきりなどの状態になりうる介護予備軍ともいえる。当事者の生活実態を明らかにすると共に、生の声を聞くことにより、高齢者の顕在・潜在的ニーズを把握することが可能となる。また一方、高齢者をフォーマル、インフォーマルに、様々な立場で支援している人たちの抱える課題をも明らかにし、両者の視点から虚弱化しやすいこれらの高齢者の支援ネットワーク構築が可能となる。本研究は、高齢者が住み慣れたまちで、その人らしい生活を実現し、最期まで住み続けることを可能にし、ひいては個々の高齢者のQOLを高めることにもつながる研究であると考ええる。

Ⅲ. 結果及び考察

<研究目的①>

1. 対象地区の概況

1) A 町(過疎地)

A 町の面積は県下市町村で第 2 位だが、町の大半は山林が占める。人口は平成 20 年 1 月 1 日現在で 1,402 人と 28 市町村の下から 2 番目である。平成 17 年度の人口密度は、4.1 人/km² であり、県下で最下位である。1 位の C 町の 1,832.1 人と比べると、どのような状況かは想像できる。

平成 19 年度の高齢者(65 歳以上)人口割合は 47.8%で、75 歳以上が 29.1%を占める。このうち独居高齢者は 239 人で、高齢者人口の 32.2%である。

集落は広大な町内に点在し、6 戸で 11 人の住民全員が高齢者という集落もこの町では珍しくない。

養蚕や林業、畑作中心の農業に加え、かつては鉱山があり、町民の生計の基盤となっていた。これらは全て衰退し、若い人は働く場所を求めて町外に移住したため、高齢者の比率は年々歳々増加し、今日に至っている。

中山間地における高齢化が進行した典型的な過疎の町と言えるが、医療と介護の視点から現在の状態を概観すると以下ようになる。

①介護保険：要介護及び要支援認定者は 112 人である。そのうちサービスの受給を受けている人は、要支援 1 が 15/16、要支援 2 が 4/9、要介護 1 が 14/17、要介護 2 が 15/19、要介護 3 が 8/11、要介護 4 が 20/22、要介護 5 が 14/18 である。介護度別一人あたりの費用額は、要支援 1 で 30,439 円、要介護 5 で 290,864 円である。

②国民健康保険：平成 19 年 5 月分レセプトによれば、通院する原因は、1 位が高血圧性疾患、2 位が筋骨格系疾患、3 位が消化器系疾患である。どんな病気にお金がかかるかでは、心臓の手術を受けた人がいたため、1 位は循環器系疾患、2 位が悪性新生物、3 位が消化器系の疾患である。一人当たりの医療費は県下でもトップクラスである。町内に診療所は 6 つあるが、歯科診療所はない。歯科診療や入院を要する時は、隣接する市町村の施設を利用している。

③予防活動：住民基本健診は 41.9%が受けており、異常なしはわずかに 12 人、要指導 128 人、要医療 245 人(要再検査 69 人を含む)であった。保健師による健康相談が地区別に開催されており、最も多い地区では平成 18 年度に 40 回、参加者総数 476 人を数えている。最も少ない地区でも 8 回、参加者総数は 79 人であった。健康相談の場が、健康教育や地域の健康問題を話し合う場になっている。

2)B 市（市街地）

B 市は Y 県の県政・文化、市政の発信源としての機能を有する最も人口の多い市で、212.41 k m²の面積に 82,701 世帯、200,096 人が暮らし、その人口密度は 1 k m²当たり 942 人である。（総務省統計局 平成 17 年度「国政調査報告」参照）

そのうち、主たる研究対象となった B 市地域包括支援センター C が管轄する地区は、戦後住宅地として整備され、働き盛り・子育て世代が同時期に居を構えた地区である。

そのために、現在、核家族化・高齢化が進み、人口・世帯数ともに年々減少しており、平成 19 年現在で一世帯に対する人数は 2.1～2.3 人で出生率も低く、高齢化率 30%、そのうち後期高齢者率 20%弱の地域である。

また、平成 20 年 2 月 1 日現在、介護保険認定者数は 819 人で、内訳は以下のとおりである。要介護 5 を除き、どの段階もほぼ同率となっており、「セルフケアが一定程度可能な高齢者、慢性疾患を抱え通院・治療を必要としている高齢者、セルフケアが困難な高齢者」等が混在している現状をうかがい知ることができる。そのために、保健・医療・福祉の連携によって、高齢者の抱えるあらゆる課題への幅広い支援が必要とされる地域といえよう。

要支援 1・・・15%

要支援 2・・・16%

要介護 1・・・17%

要介護 2・・・15%

要介護 3・・・16%

要介護 4・・・13%

要介護 5・・・8%

本地区は市街地として生活の利便性は高く、デパート、スーパー、病院等が地区近郊に配備されている。しかし、高齢者の健康維持やリハビリを兼ねた 10 分程度の徒歩による外出場所としては距離的に遠く、必然的に公共交通機関やタクシー等の利用が必要となるが、その利便性と必要経費のことを考えると、外出を控えてしまう生活環境であるともいえよう。

2. 対象の背景

1) A 町（過疎地）

A 町の対象の背景は、表 1 に示したとおり、一人暮らし高齢者 6 名、夫婦世帯高齢者 6 名の計 12 名であった。性別は、女性 9 名、男性 3 名、年齢範囲は、70 歳代後半～90 歳代前半で、平均年齢は 80 歳代前半（82.5 歳）であった。また、12 名ともに、介護保険の要介護認定は受けていなかった。

一人暮らし高齢者は、全員が 80 歳代の女性であった。一方、夫婦世帯高齢者は、男女各 3 名で、年齢範囲は 70 歳代後半～90 歳代前半であった。

対象の居住地域は、地区の概況で述べたとおり高齢化率が高く、集落は山間部に点在し、そこに住む人々の多くは高齢者であった。

表 1 対象の背景（A 町）

区分	事例	性別	年齢
一人暮らし高齢者	s－1	女性	80 歳代前半
	s－2	女性	80 歳代前半
	s－3	女性	80 歳代前半
	s－4	女性	80 歳代後半
	s－5	女性	80 歳代前半
	s－6	女性	80 歳代後半
夫婦世帯高齢者	f－1	男性	90 歳代前半
	f－2	男性	70 歳代後半
	f－3	男性	80 歳代後半
	f－4	女性	80 歳代前半
	f－5	女性	70 歳代後半
	f－6	女性	80 歳代前半

2)B 市（市街地）

B 市の市街地に生活する一人暮らし高齢者 5 名、夫婦世帯高齢者 5 名の計 10 名に対しインタビューを行った。対象となった高齢者の性別は、女性 7 名、男性 3 名であり、年齢範囲は、70 歳代後半～80 歳代後半で、平均年齢は 81.2 歳であった。また、10 名全員が要支援 1 から要介護 2 までの介護保険の認定を受けていた。

一人暮らし高齢者は、2 名が男性であり、二人とも 70 歳代後半、3 名は女性で 70 歳代後半から 80 歳代後半であった。一方、夫婦世帯高齢者は、男性 1 名で、80 歳代前半、女性 4 名は 70 歳代後半～80 歳代後半であった。具体的には下表 2 のとおりである。

表 2 対象の背景（B 市）

区分	事例	性別	年齢
一人暮らし高齢者	s－1	女性	80 歳代前半
	s－2	男性	70 歳代後半
	s－3	男性	70 歳代後半
	s－4	女性	80 歳代前半
	s－5	女性	70 歳代後半
夫婦世帯高齢者	f－1	女性	70 歳代後半
	f－2	女性	80 歳代前半
	f－3	女性	80 歳代後半
	f－4	男性	80 歳代前半
	f－5	女性	80 歳代前半

3. ひとり暮らし・夫婦世帯高齢者の現在および今後の生活に対する思い

1) A 町（過疎地）

A 町の高齢者の思いは、【大好きな百姓をしながらここ（A 町）に住み続けたい】【別居子の帰省や近隣との交流が楽しみ】【別居子や近隣などの支援があるから安心】【日々の暮らしにおける心配・悩みがある】【自分なりの保健行動とところがまえを持って生活している】の 5 つのカテゴリに大別された。

(1) 【大好きな百姓をしながらここ（A 町）に住み続けたい】

このカテゴリは、[ここ（A 町）での生活が一番いい]、[働くこと（百姓）が生きがいだ]、[ここで働き、ずっと住み続けたい]で構成されていた。

A 町の高齢者は、これからも「今まで通りここで暮らしていきたい」「今と同じ生活をずっと続けていきたい」のように、これまで住み続けた地域での生活を続けたいという思いと、「ここには都会にはないよさがあるからここがいい」「この空気は気持ちが良い」「ここでの生活は自分の身体に馴染んでいる」のように、長年住み慣れた農山村地域に対し[ここ（A 町）での生活が一番いい]という思いを持って生活していることが窺えた。また、「気なりにやっているからいい」「好きなように生活しているからいい」「ひとりが自由でいい」のように、住み慣れた地域で、自分のペースで自由気ままに生活することへの願望を持っていた。さらに、「働くことが生きがいだ」「野菜づくりはやり甲斐がある、楽しみだ」のように、働くことにやり甲斐や楽しみを見出し、[働くこと（百姓）が生きがいだ]という思いと、「一日も長く、ここで働き続けたい」「ここ（A 町）で最期を迎えたい」のように、[ここ（A 町）で働き、ずっと住み続けたい]という思いを持ちながら生活していることが窺えた。

(2) 【別居子の帰省や近隣との交流が楽しみ】

このカテゴリは、[隣近所で集まっておしゃべりするのが楽しみだ]、[別居のこども達が来るのが楽しみだ]で構成されていた。

A 町の高齢者は、「隣近所の顔なじみ同士で話をするのが楽しみだ」「公民館で保健師さんに健康の話を聞いたり料理を教わるのが楽しみだ」「家に人が来たり、電話で話すことが楽しみだ」のように、普段から近隣同士の付き合いが盛んであることが窺え、[隣近所で集まっておしゃべりするのが楽しみだ]という思いを持ちながら生活していた。

また、「別居の家族（息子・娘・孫等）が盆や正月などに大勢でくるのが楽しみだ」「自分の欲しい物をあれこれ子どもが買ってきてくれるのが楽しみだ」などのように、1 年の節目の時期や定期的に訪れる別居子との良好な関係が窺え、高齢者は[別居のこども達が来るのが楽しみだ]という思いを持ちながら生活していることが窺えた。

(3) 【別居子や近隣などの支援があるから安心】

このカテゴリは、[別居の子どもや親戚を頼りにしている]、[近隣同士がお互いに助け合っているから安心だ]、[町のサービスや農協はありがたい]で構成されていた。

A 町の高齢者は、「具合が悪くなったら子どもに電話する」「困った時は子どもに電話する」「子どもが一日おきに電話くれるから安心だ」のように、離れていても病気や緊急時にはすぐに支援の得られる体制に安心し、[別居の子どもや親戚を頼りにしている]という思い持ちながら生活していた。

また「普段から近所同士が仲良くしているから大丈夫だ」「定期受診は車を所有している人を頼んで一緒に行く」「近所の人が二つ返事で用を足してくれるのでありがたい」のように、普段からの近隣の関係性が、いざというときの支えになっていることが窺え、[近隣同士がお互いに助け合っているから安心だ]という高齢者の思いにつながっていることが窺えた。

さらに「町で病院を受診する時の送迎をしてくれるからありがたい」「保健師さんに力になってもらっているから安心だ」「年1回の町の健診で悪いところは見つけてくれるので助かっている」などのように、高齢者の心配ごとである健康面への支援が安心に繋がっている内容や、「買い物は農協があるから安心だ」「移動販売があるので、買い物には不自由しない」のように農山村地域ならではの買い物方法が語られていた。また、「町でタクシーの補助をしてくれるので助かる」「雪が降ったときは、町で除雪車を出してくれるのでありがたい」のように、A 町のような過疎地域では、行政の支援が生活に欠かせず[町のサービスや農協はありがたい]という高齢者の思いに繋がっていることが窺えた。

(4) 【日々の暮らしにおける心配・悩みがある】

このカテゴリは、[年をとって、年々身体が思うようにならなくなりづらい]、[〇〇が心配だ]で構成されていた。

本研究対象者は、大半が80代～90代の超高齢者であった。「もう少し頑張りたいけど、一年一年身体が大変になりづらい」「耳が遠いことが一番残念だ（人の話がわからないから情けない）」のように、加齢（老化）現象が日常生活へ与える影響についての悩みである[年をとって、年々身体が思うようにならなくなりづらい]という高齢者の思いにつながっていることが窺えた。

また、「近所に人が少なくなって寂しい」「村の行事（組長・祭りなど）を毎年ひとりですることが段々と大変になり悩みだ」「部落も年寄りばかりだから、何をやるにも参加する人がいなくて大変だ」のように、地域社会での伝承行事への参加や日々の暮らしに不可欠な地域交流などに対しては、高齢化率の高い過疎地特有の悩みである[〇〇が心配

だ]という高齢者の思いが語られていた。また、「バスの本数が少なくて不便だ」「病院へ行くバス賃も往復だとばかにならない」「不便なところなので若い人はもう帰ってこない。空き家になったときの対策はないか」などのような農山村地域ならではの悩み、「先のことはどうなるかわからない」「腰が痛いのが一番心配だ」など自分の健康面に対する悩み、「親しい人の死がショックだった」「夫の認知症が進行して心配だ」など他的高齢者に関する心配ごとなどが語られていた。

(5) 【自分なりの保健行動とところがまえを持って生活している】

このカテゴリは、[健康（病気やケガ）に注意しながら生活している]、[生き方・ところがまえなど]で構成されていた。

A 町の高齢者は、「転ばないように注意して生活している」「無理をしないように暮らしている」など、日々の暮らしの中で健康障害を引き起こさないための工夫と、「身体に良いことは自分なりにやっている」「毎日、夕方歩いている」のように、[健康（病気やケガ）に注意しながら生活している]といった保健行動をとりながら生活していることが窺えた。

また、「人に何かをしてあげることが好き」「区長をやらせてもらっていることが活気の一つだ」など役割の認識に対するものや、「人の悪口は言わない」「楽しく生きなければ損だ」「人間、苦労はすべきだ」や、「自分の苦労がないと人の理解はできない」「姑が生きた年齢を自分も生きることが姑孝行の手柄だと思って頑張ってきた」「子どもが来たときは暗い顔をしていると暗くなるから明るくしている」のように、日々の生活における様々な[生き方・ところがまえなど]を持ち、自分を奮い立たせて意欲を維持しながら生活していることが窺えた。

<A 町 ひとり暮らし・夫婦世帯高齢者の思い>

隣近所で集まっておしゃべりするのが楽しみだ

- ・ 隣近所の顔なじみ同士で話をするのが楽しみだ
- ・ 公民館に集まって、皆で食事を作っておしゃべりしながら食べるのが楽しみだ
- ・ 公民館に集まって、皆でお茶を飲みながら話をするのが楽しみだ
- ・ 公民館で、保健師さんから健康の話を聞いたり、料理を教わるのが楽しみだ
- ・ ゲートボールに行くとみんなの顔が見られるから楽しみだ
- ・ 家に人が来たり、電話で話すことが楽しみだ
- ・ みんなと集まる月 3 回のお題目が楽しみだ
- ・ 年をとってからは、遠くへ旅行するより子どもと遊ぶのが楽しみだ

別居のこども達が来るのが楽しみだ

- ・ 別居の家族（息子・娘・孫等）が盆や正月などに大勢で来るのが楽しみだ
- ・ 自分の欲しい物をあれこれ子どもが買ってきてくれるのが楽しみだ

ここ（A 町）での生活が一番いい

- ・ ここには都会にはないよさがあるからここがいい
- ・ ここの空気は気持ちがいい
- ・ ここでの生活は自分の身体に馴染んでいる
- ・ 気なりにやっているからいい
- ・ 好きなように生活しているからいい
- ・ ひとりが自由でいい
- ・ 毎日同じことの繰り返しだが、今の生活は結構楽しい
- ・ 今の生活に満足している、今が一番幸せだ
- ・ 今と同じ生活をずっと続けていきたい
- ・ 今まで通りここで暮らしていきたい
- ・ 妻と二人で生活していただけることが幸せだ
- ・ 夫婦二人が元気なうちは、ここで生活したい

働くこと（百姓）が生きがいだ

- ・ 働くことが生きがいだ
- ・ 働くことは苦にならない（好き）
- ・ 百姓の仕事は結構楽しい
- ・ 百姓仕事が続けられることが嬉しい
- ・ 百姓が好き
- ・ 野菜づくりはやり甲斐がある、楽しみだ
- ・ 毎日遊んでいるのは嫌（暇なのは嫌）

ここ（A町）で働き、ずっと住み続けたい

- ・ 一日も長く、ここで働き続けたい
- ・ 一日も長く、ここに住み続けたい
- ・ ここで最期を迎えたい
- ・ 身体と相談しながら、欲をかかずに働くのがいい

別居の子どもや親戚を頼りにしている

- ・ 別居（他市町村に居住）の息子を頼りにしている
- ・ 何かあったときは、別居の子供が頼りになる
- ・ 具合が悪くなったら子どもに電話する
- ・ 困った時は子どもに電話する
- ・ 子どもは離れているが、よくしてくれるから安心だ
- ・ 子どもが生活費や衣類を送ってくれるので助かる
- ・ 1人で暮らしていても、子どもは「お母ちゃんが幸せなら」と言ってくれる
- ・ 県内にいる娘が時々来てくれるから安心だ
- ・ 子どもが1日おきに電話くれるから安心だ
- ・ 美味しいものをどっさり買ってきてくれるから助かる
- ・ まわりに親戚がいるから、助けられている
- ・ 水道のことや電気が切れたときは近くの親戚をうんと頼りにしているが、その人も病気になる、うんと心配だ

近隣同士がお互いに助け合っているから安心だ

- ・ ふだんから近所同士が仲良くしているから大丈夫だ
- ・ まわりがうんといいい人たちばかりだから助かる
- ・ 近所の人が優しいから安心だ
- ・ この部落の人は心が温かい、家族の悪口は言わない
- ・ 部落の人はみんなうちつきりだから何でも話せ、みんなの力を借りている
- ・ 急病のときも、近所の車を所有している人を頼むから安心だ
- ・ 定期受診は車を所有している人を頼んで一緒に行く
- ・ 子どもが来てくれるのに時間がかかるので、近所の人に頼っている
- ・ 近所の人が二つ返事で用を足してくれるのでありがたい
- ・ 近所の人がお正月やお盆の花やクルミを取ってきてくれるのでありがたい
- ・ 障害のある人にも互いに声をかけ合っている

町のサービスや農協はありがたい

- ・ 町で病院を受診するときの送迎をやってくれるからありがたい
- ・ 町でタクシーの補助をしてくれるので助かる
- ・ 救急車があるから安心だ
- ・ 保健師さんに力になってもらっているから安心だ
- ・ 保健師さんが健康についての相談に乗ってくれるのでありがたい
- ・ 雪が降ったときは、町で除雪車を出してくれるのでありがたい
- ・ 年1回の町の健診で悪いところは見つけてくれるので助かっている
- ・ 買い物は農協があるから安心だ
- ・ 移動販売があるので、買い物には不自由しない

年をとって、年々身体が思うようにならなくなりづらい

- ・ もう少し頑張りたいけど、1年1年身体が大変になりづらい
- ・ 耳が遠いことが一番残念だ（人の話が分からないから情けない）
- ・ 足がよければ人に何でもしてやりたいが、できないので悔しい

健康（病気やケガ）に注意しながら生活している

- ・ 転ばないように注意して生活している
- ・ 身体にいいことは自分なりにやっている
- ・ 健康には自分なりに気をつけている
- ・ ケガをしないように暮らしている
- ・ 無理をしないようにしている
- ・ 身体の具合や調整に努力しながら生活している
- ・ 毎日、夕方歩いている

〇〇が心配・悩みだ

- ・ 地震や風水害などの災害が心配だ
- ・ （地区に）若い人がいないから困る、寂しい
- ・ 近所に人が少なくなって寂しい
- ・ 村の行事（組長・祭り等）を毎年ひとりでやるのが段々と大変になり、悩みだ
- ・ 部落も年寄りばかりだから、何かやるのにも参加する人がいなくて大変だ
- ・ 先のことはどうなるか分からない
- ・ 今元気でも、いつどうなるか分からないと思っている
- ・ バスの本数が少なくて不便だ
- ・ 長く寝付くことが心配だ
- ・ 肩が痛くてしびれていることが一番困る
- ・ 腰が痛いのが一番つらい
- ・ 手が痛いから、年をとって娘のやっかいにならないかと心配だ
- ・ せっかく作った野菜を猿が食べてしまうのは悔しい（悩みだ）
- ・ 夫の認知症が進行して心配だ
- ・ 親しい人の死がショックだった
- ・ 頼りにしていた人が亡くなって何に手をつけていいか分からなかった
- ・ 不便なところなので若い人はもう帰ってこない。空き家になったときの対策はないか
- ・ 病院へ行くバス賃も往復だとばかにならない

生き方・ころがまえ 等

- ・ 55 年間日記をつけている
- ・ 自分なりにローマ字や大正琴を習っている
- ・ 人に何かをしてあげることが好き
- ・ 区長をやらせてもらっていることが活気の 1 つだ
- ・ 経を唱えると自分が磨かれ、今日 1 日がよかったと思える
- ・ 部落の皆で、月に 3 回以上お題目を唱えていることは自慢できる
- ・ 子どもに野菜や煮物を宅急便で送っている
- ・ 明るく生きている
- ・ 人の悪口は言わない
- ・ 楽しく生きなければ損だ
- ・ 嫌なことも心にしまっておかない
- ・ 自分ひとりで悩んでいないで発散するのがいい
- ・ 子どもが来たときは暗い顔をしていると暗くなるから明るくしている
- ・ 片手で大変だが、頑張っている
- ・ 姑が生きた年齢を自分も生きることが、姑孝行の手柄だと思って頑張ってきた
- ・ 人間、苦勞はすべきだ
- ・ 自分の苦勞がないと人の理解はできない
- ・ 戸締まりや火の始末に気をつけている

2)B市（市街地）

B市のひとり暮らし・夫婦世帯高齢者へのインタビュー内容は、それぞれについて【健康状態】【人間関係】【経済状況】【福祉サービス】【衣食住】【楽しみ】【将来の展望】の7項目に大別できた。

【健康状態】に関しては、「常時、からだに痛みを感じ、病気の治療を続けながら生活・からだは年々衰えていくことを実感・不自由なところや病気とつきあいながら生活」しながらも、夫婦世帯にあつては「つれあいの健康」を気遣い、各自が「無理をしない程度にからだを動かしている」という現状を語っている。また、ひとり暮らし高齢者にあつては、「いつ倒れるのか」わからないという心配を表出している。

【人間関係】に関しては、夫婦世帯では、「夫婦関係・親子関係・親族関係・地縁関係・医療職との関係」について語っており、お互いに助けあつて生活を送るために「夫婦の間でも思いや気持ちを言葉にすることの大切さ」を感じており、子供のなかでもとくに娘を頼りに思い、「近所みんな年寄りになった・日々の生活の付き合いがなくなった・無尽の付き合いは続いている」現状を述べ、寂しさとともに無尽の付き合いの意味を確認している。

また、一人暮らし高齢者においては、「つれあい亡き後の心の整理」にかなりの年月が必要なこと、息子や自身の兄弟との関係が大切であること、近所付き合いがだんだんと疎遠になりながらも目を配ってくれていること、「新しい関係づくりは億劫だ」と思いながらも「努めて人と交わろう」と努力している姿勢が表出されている。新しい人間関係形成においては、夫婦世帯よりも一人暮らし高齢者のほうが前向きな姿勢が窺える。

【経済状況】に関しては、双方ともに、年金を頼りに生活を送るが、公共料金を含めた支出の割合が年々高くなり不安であることを表出している。

【福祉サービス】に関しては、「年寄りにとっては“良い時代”」だと、さまざまなサービスが提供されることを肯定的に受け止めている。特に、デイサービス利用は、不足しがちな人との会話や新しい人との関係形成やリハビリ効果を得ている。しかし、慣れるまでの大変さを表出している。また、介護保険サービスについて担当者の対応が不親切であること、ホームヘルプサービスの内容に融通が利かないことへの不満が語られた。

【衣食住】に関しては、食材の調達から食事準備、片付けにいたる「食」の確保についての内容が大半を占めた。また、掃除の大変さも表出している。

【楽しみ】については、男性の場合、テレビを観たり新聞を読むことを挙げる人が多く、続いて男女を問わず、趣味（絵画・ゴルフ・編み物など）、買い物等を挙げている。

【将来の展望】に関しては、高齢者夫婦世帯においては、「自然に二人で、あの世にいけるのが一番」と考えているが、「死」を身近なものと認識しながらも、そこに至るプロセスの現実と理想のギャップを吐露している。また、一人暮らし高齢者の場合は、いつ倒れるかわからない不安を常に感じており、終の住処を施設と考えていることが窺えた。

<B市 夫婦世帯高齢者の思い>

健康状態

①無理をしない程度にからだを動かしている

- ・15分～30分ぐらいの歩行
- ・1時間程度の買い物

②からだが年々衰えていくことを実感している

- ・若いときのようにはいかない
- ・年には勝てない
- ・以前、出来ていたことが出来なくなることが不思議
- ・この前も病気したから、あといく年も生きられないと思い、自分の今までの集大成で本を出版

③常時、からだに痛みを感じたり、病気の治療を続けながら生活をしている

- ・寝たり起きたりするときに足腰が痛む
- ・糖尿病と長く付き合っている
- ・心臓にペースメーカーを入れている
- ・呼吸が息苦しい
- ・寝ているとき、手足が曲がったまま硬直する
- ・利尿剤を飲んでいるから出かけられない。出かけるときはパットを使用している
- ・本当に動きたくない。この腰の痛みが少なくなって動けるようになればいい

④つれあいの健康が心配だ

- ・(つれあいが) 転倒しないかと心配でこわい
- ・(つれあいが) 言うことを聞かない。毎日おもらししていて大変
- ・(つれあいが) 心配になって、一泊程度の近場への旅行ぐらいしか行けない

⑤健康は過信してはいけない

- ・(健康診断) 受けに行った方がいい。健康な人ほどそういう事しないからね。過信しすぎる
- ・ある日突然明け方、息苦しくなった。顔が浮腫んじやって救急車で酸素吸入をしながら病院に入院した

人間関係

①夫婦関係

(a) お互いに助け合って生活している

- ・喧嘩もするけど、二人は安気なところもある
- ・お互いに助け合って生活している。子供がいらないから、来てくれっていうことができないのは寂しい
- ・(夫が) ゴミ出しを日課にしているが、助かっているが、車が多い道端なので心配。それをダメって言うともた、ヘソを曲げる
- ・(友達夫婦を見ていて) つれあいがいなくなれば、(残されたほうの) ボケが始まるのが早い

(b) 夫婦の間でも思いや気持ちを言葉にすることは大切

- ・ 家にいて二人だけじゃ、話題だって、そうあるものではない
- ・ 感謝している。（笑い）口には出さないけど（感謝）している
- ・ 感謝を言葉にして欲しい
- ・ 昔は、なんて言うか、怒ったっていうか、悪態をついたようなことを僕も言ったけどね。もう年をとって二人になってからはね、そういうことは、こっちの方が引き下がつて、あーそうかっていうようになっちゃった

②親子関係

(a) 娘は頼りになる

- ・ 子供でも、女の子の方が頼りになる。男っていうのは、最後には男でしょう
- ・ みんな子供を周りに置いて、嫁にやった娘まで側において、それはうんと助かる
- ・ 毎日のように電話をかけてくる
- ・ 子供達も、1週間か2週間のうちに誰かどうにか来る
- ・ 気遣いがね、やっぱりね、男の子と女の子じゃ違うかもしれない

③親族関係

- ・ 甥とか姪とかね、そういう人たちが集まってくれるから楽しみ

④地縁関係

(a) 近所みんな年寄りばかりになった

- ・ （近隣に）男の人がほとんど居ない ・ （隣近所で）話があう人がいない
- ・ みんな年をとったらね、話があわなくなっちゃった

(b) 日々の生活のつきあいがなくなった

- ・ 何か煮れば持ってってやるとかね、今、全然（そういうつきあいはない）
- ・ 井戸端会議とか（の時間もない）
- ・ 隣同士で声掛け合っていれば状況が分かるから、お互いに心がけましょう（と言っている）
- ・ 近所のありがたさは、本当に身にしみてよかった

(c) 無尽のつきあいは続いている

- ・ お互いに出ないからね。無尽のときだけ行き会う
- ・ 隣組で無尽があったんだけど、私のほうでは私を中心にちょっと月に一度だけグループ活動をして

⑤医療職との関係

(a) やさしい医者や看護師が良い

- ・ 目と目が合って、こう、何となくあったから、あ、この先生いいなと思って・・・
- ・ 患者さんをね、そんな、いたわってくれたってことね
- ・ （主治医は）ハンサムばっかでないのよ、優しい

- ・看護師さんが週に一回来てくださる。夜間でも電話くださいって云うんで(電話番号) 書いといた。脈をとったり、血圧測ったり、酸素を測ったり、爪をきるなら切りますよって

経済状況

①税金や公共料金が負担

- ・困ってないって言っても、腹じゃ本当は困っている
- ・別に食べるには困らないけれどその他が困る
- ・今まで年金で税金がかかったことなんてなかった
- ・国民健康保険、保険、保険料ね、市民税、固定資産税って、払うもんばっかし
- ・いろんなもの上がってくるでしょ。入ってくる金は当たり前で減ってくるばっか

②タクシーは便利だがお金がかかる

- ・タクシーで行って帰ってくるだけで高ければ 3000 円

福祉サービス

①デイサービス利用はそれなりに楽しい

- ・(デイサービスでの楽しみは) 会話だね、やっぱしね
- ・(デイサービス) まあ、いろいろな人がいるからね。それなりの付き合いをしてね
- ・リハビリになる

②年寄りにとっては“良い時代”

- ・介護保険やってもらえるから(いい)。なかったら寂しい
- ・マネージャーが「具合が悪くなったら、夜中でも何でもいいから電話くれ」って言うてくれた。それを聞いただけで安心
- ・(昔は) おばすて山。(今は) 捨てるっていつでも病院に捨てるんだからいい時代
- ・(ヘルパーさんが来てくれたとき、情報など) 新しい事がいっぱい入ってくる
- ・タクシーの運転手さんが親切
- ・支援センターでは、連絡調整をしてくれる。クスリをつけてあげるって、介護保険でお風呂なんかも、椅子と腰掛けと、いろいろ心配してくれた

③介護保険サービスは融通が利かないことがあり不満

- ・要支援になっちゃった。でもね、支援でもね、買い物だけはしてくれる
- ・介護 1 の時は、これもあれも使えますよって言うてくれた。で、今になって何にもダメですよって言われたら「あれまあ」と思う。私矛盾しているねって言うの
- ・1 時間のうち 40 分くらい掃除機でやってくれる。ご丁寧といえばご丁寧。でもカットしてくれていい。その分ちょこっと玄関を掃いたり庭を掃いたりして欲しい
- ・市役所のシルバーセンターに頼んでいいですよって言われるけれど、頼みつかない
- ・ヘルパーさんに(料理を)頼む時間はない。1 時間ではとてもね

④まだ、他人の世話にはなりたくない

- ・まだ見てもらわなくてもいいよっちゅうような感じ

衣食住

①食事の準備は大変

- ・（子供が）冷凍できるものは冷凍してってくれる
- ・おかずくらい何とかね、長く立ってられないから簡単なものを作る
- ・半年くらいで自分で調理はできるようになりました
- ・足が悪いから立ってられない。高い椅子にちょっと腰を下ろして（自分で調理する）

②食事の味付けや量の変化

- ・あんまり、しょっぱい物は食べないようにしている
- ・昔はね、うんと脂っこい物好きだった。今はあまりしない
- ・肉でも魚でもね、本当に少し食べるだけ
- ・キチッと食事と同じように取る、お酒もこの程度、それがいいじゃないかなと思う
- ・（一番大変だと思うこと）食べ物がね。甘いものダメ、辛いものダメ、イライラする

③食材は宅配を利用

- ・生活クラブは持ってきてくれる。今はグループがあってグループのところへ届くの
を娘が持ってくる
- ・紙に書いて注文する

④家の掃除は大変

- ・掃除は僕がやるだけどね、二階からずっとやるだけどね、結構大変
- ・掃除は主人がしてくれる。見た目はきれいにしてくれる。80 を過ぎていますからでき
ないこともある
- ・私よりはいい。ガラスふきなどは一年に一回くらい業者に頼む
- ・（主人が）掃除、洗濯、庭掃除、全部やってくれますから

楽しみ

- ・テレビや新聞
- ・ちょっと絵を描く
- ・私たち（話せる人形とわたし）二人会話するの。この子の言うことは私わかるから
- ・先生方（かかりつけの医者）かまってみたりね、先生のところ言って笑わせたりする
- ・人間は行きたいところ行けないとね
- ・お洗濯して、食べる事して、お洗濯して、編み物してね、うんと具合がいい
- ・今は（編み物で何か一つ作るのに時間が）かかる。一ヶ月に一つできればいい
- ・何かしていないと寂しい
- ・朝、畑ができる。大根蒔いて、まだ茄子がね、秋茄子がなる
- ・前は外でスポーツ。うまくないけど、ゴルフだね。今朝も夢をみてね。ゴルフの夢

- ・パソコンで 囲碁を。相手がなくてもできる
- ・食事へどこかへ行く
- ・ご近所の女の方々と手芸教室に行っていた。ちょっと皆の顔を眺めれば、ストレスの解消になる
- ・主人は庭の草取りくらい。ご近所付き合いはあっても、将棋とか碁とか
- ・Oデパートへいったり、Yデパートに行ったり、タクシーでね

将来の展望

- ・だから、もう自然に体がね、参って、自然に二人で、あの世行けるって言うのが一番
- ・年寄りが入院してるじゃない、そういうとこ入る。倒れれば、もう、それでいいの
- ・こんなにっぱな墓がでると、あの世に行っても良いよ
- ・死んでから、（今すんでいる家は）どうにでもしろしって
- ・お墓だけはいつでも入れるようにしてやったから、いつでも二人でいける
- ・いつ病むかわからないしね、どこがいつ痛くなるかって自分ではなかなか分からないところがあるからね
- ・病院へ入院すれば看護師さんが丁寧にやってくれるからありがたいけれど、そうはなりたくない
- ・介護って私にはできないよ。食事の支度くらいはできるけど
- ・今から未来が明るくないですからね。絶対に。暗くするわけじゃないけど明るくなるわけがない
- ・子供がいないのです。何にしても二人で何とか最後まで頑張らないと
- ・後に残った人がどうなるだろうと思って、それが心配で
- ・ぜひ長く、このままの生活ができれば良いと思います

<B市 ひとり暮らし高齢者の思い>

健康状態

①不自由なところや病気とつきあいながら生活

- ・家の中は杖をついてね。家の中が狭いですから。方々につかまりながら歩いている
- ・家で年中（発声練習を）やっている
- ・心臓の障害がある。障害者三級を持っている
- ・7年前までは、自分でこう自由に歩けたわけだからね。それがもう歩けんようになってしまった
- ・握力も弱っている、リウマチだから。悪いところだらけ、それで何で要介護2に下がっちゃうわけ
- ・先生に、1時間なんて歩いちゃダメ、20分～30分くらい歩けばいいって言われている。町内一回りすればそのくらいになるからね、あっち立ち寄り、こっち立ち寄りしていればね、20分くらいになる
- ・若い時に忙しくてお医者へ行かれなかった。無理しちゃった。股関節が悪い。足がちょっと不便
- ・どうせ家の中でごろごろ、ごろごろして寝ているよりかは、そこ（体操に）へ行く・
- ・肩が痛いだね。まあ、年も年だからね。若いようなわけにはいかんからね、薬をもらって飲んでる

②倒れないか心配

- ・いつ、また、倒れるかね・・
- ・ほんとわかんないけどね。今日、こんなんでも明日また
- ・何しろね、私の一番の心配はね、（発作時に）電話が掛けられないこと
- ・今のところは家に昼間居てもね、あれだけどね。ただ夜、心配。それだけです

③買い物で、いろいろ選ぶのが面倒になった

- ・みんなについて買い物がてら、オギノさんに行ってみようかなと思うけど、もう、いろいろなところを見て回るが面倒くさい

人間関係

①夫婦関係

(a)つれあい亡きあとの心の整理

- ・平成元年に主人が亡くなり一人暮らしになった
- ・やっぱり、（妻が亡くなって）最初は辛かった
- ・あれ（夫）は、いい人でした、まあ、まあ、いい人でした
- ・まあ、申し分のない人でした
- ・（夫が亡くなって）このごろやっと、気持ちが晴れる、はなれたよう

- ・人が言うに、一年くらいは駄目だねえって言われたけど、一年じゃ駄目でしたね
- ・今はそんなに（亡き夫の夢は）見ません。もう慣れたっていうところですよね

②親子関係

(a) 息子達も何かと気に掛けてくれるが・・・

- ・息子は月に一、二回帰ってくる。買い物でもしょうなんて連れて行ってくれる
- ・二番目(息子)が一週間おきくらいに、「何か買うもんあるけ」って電話してくる
- ・次男ね、横浜から帰ってくれば線香あげてくれます
- ・顔を見ていくって、たまに寄りますけど
- ・そうだね、だいたい週に一回くらいかな
- ・息子たちといっしょに生活してみようと思ったことはない。まだそこまで考えたことはない
- ・息子たちも割合よくしてくれた。まあ結局こまるっていうのがない。のんき、のんきですね。気にしないですね。苦にしないってことかしら
- ・息子が親をみるのは嫌だって出てっちゃった。娘は嫁にいったからひとりっちゅわけ
- ・(息子は) 来ない、来ない

(b) 娘は頼りにしているが・・・

- ・だからね、(娘が) 来るのが大変だから、それで、こっちに俺が越してきたの。
- ・(頼りにしているのは) やっぱ、娘だね。
- ・むすめが通信販売カタログを見て、ものを買っている。わしなん全然関係ねえもんばっかりちゃわけ、化粧品みたいなもんばっかり、わしの名前の貯金通帳を持っていった、これでおろしちゃってるわけだ
- ・(娘は) 幸せじゃねえから、こんなことやっているんじゃないかと思うけどさ
- ・娘も勤めてるこんだし、来てくれって、行って来てくれって言うわけにもいかんし
- ・金が欲しけりゃ、「お父ちゃん、こういうわけで欲しいよ」っていやー別だけど

(c) 嫁・婿はいろいろ・・・

- ・(婿は) ほんといい人でね。
- ・(嫁たちは) きついよ。みんなきついよ

③親族関係

(a) 兄弟は心の支え

- ・裏に妹が居るからね。
- ・ちょこちょこそこへ行っちゃあね、息抜き
- ・一人で居るよりかはね（心強い）
- ・妹もちょっと忙しい仕事を持ってるようだから、前のようにちょこちょこ行かない
- ・お父さんがなくなったあと、ほとんど一日おきくらいには顔出してくれました

・その人（妹）が来てくれたからね。それこそ一人でいたら、まるっきり一人でしょ
(b)甥や孫の助けはうれしい

- ・甥っ子っていのがね、面倒見てくれるからね、おばちゃんこうする、ああするなんて言ってくれてね、気にしてくれるからね。だからね、助かりますよ
- ・おばあちゃん、おばあちゃんってね。あのこの間も、敬老のときにあの、サッカーやってるあれが、15日の日に毎年送ってきてくれます。ありがたく思っています

④地縁関係

(a)近所の人になにかと目を掛けてくれる

- ・回覧板などを届けてくれる人がいる
- ・つい一月ばかり前にも、トイレがびしょびしょになってたので、直してくださった
- ・この前のお宅の大きな木があって葉っぱが落ちる、一生懸命お掃除してくださる
- ・ご近所のドブ掃除っていうのでしょうか、若い人達がするからって言ってね
- ・大家さんがね、手すりつけてくれました
- ・お隣には鍵も預けてありますからね。だからちょっと具合悪いときにはね、新聞受けを覗きに来てくれる。それでね、トントンって叩いて、「おばちゃん大丈夫」なんつってね。寝坊したときにはそういうふうにしてくれるからね

(b)だんだん疎遠になってきた

- ・（ご近所に同じくらいの歳の人が）二人ばかりいる。そういう人達とお風呂に行っていたですよ。でもこのところ、私が車に乗らないのでね。（行かなくなった）
- ・外に出ないので、この周りの（最近の）ことはあまり知らないですよ
- ・来た当時はね、みんな（遊びに）来たよ。だけど、最近はもう誰も来ない
- ・みんなね、ほら、なんていうのかな、病気してるし

(c)新しい関係づくりは億劫だ

- ・（新しい友人は）うん、できないねえ、やっぱり
- ・（顔なじみは）いるけどね、やっぱり話すだけだよ
- ・若い人だとね、あの、話が合わないしね
- ・私はあんまり近所付き合いは……。近所はあるけどね、あんまりやらない
- ・人間関係が下手だかなんだかね……。（デイサービスに行くのは）億劫
- ・知らない人の中に入るのは気兼ねもあるし

(d)努めて人と交わろうとしている

- ・体操しに行ってる。簡単にほら、知らなくても、肩並べて話し寄るから
- ・顔は知らないけどね、顔を見るだけでもね、あの、いいからねえって
- ・運動会だあ、毎年。応援しながら見せてもらったりして、楽しみにしてます
- ・やっぱり人間はお話をしなくっちゃダメだって。家へ引きこもっちゃダメだって言うから、だからお友達が遊びにおいでと、おしゃべりしてね

- ・何か変わった物をもらえば持つてくとかね、また向こうでも何か持つてきてくれるとかっていうようにね、そういう状態のつきあいをしている
- ・（友達のところは）自分の親戚だと思ってね、行っているからね

経済状況

①年金が頼り

- ・年金が一番ね。小さい年金三万でしょ
- ・もう少しおおければ(年金)と思いますけど、これはしょうがないです
- ・基礎年金と厚生年金で一人じゃ何とかやっていける。心配だけどどうにもならん
- ・国民年金だけだね、60 からもらっていたからね、お父さんと仕事をしていたから、みんな1万円ずつ貯金していたんです。そういうのが残るんです

②息子たちが助けてくれる

- ・息子たちが帰ってきて買い物に行くなんて時はみんな出してくれる。まあ、何とかやっています
- ・冠婚葬祭なども親戚は息子が出してくれる。ご近所は私が出してます

福祉サービス

①ヘルパーもいろいろ

- ・ヘルパーは月に四回、掃除をみな綺麗にさせていただいて、とても丁寧
- ・買い物はヘルパーにやってもらってる
- ・ヘルパー、ちょっと若い人だと困ります。頼んだものがわからなくて別のもの買ってくる

②デイサービスは行き始めると楽しいが・・・

- ・今、デイサービスに行っているんです。面白いです。いい温泉だそうでよかったです。朝礼をしてお風呂に入るんです。お昼までぬりえ、暦づくりなんかをやるんです
- ・（デイサービスの回数は）そのくらい（週二回）でちょうどいいんじゃない
- ・（デイサービスは）時間が来れば時間で動くから、私にはちょっと無理
- ・家にいるのが困って退屈で、行ってみようかなんて気持ちになれば行く
- ・デイサービスなんか行けんだよ、風呂にいっぺん入るのに千二百円かかる。送り迎えの費用、昼飯を出してくれる。個別割にすりゃ高いもんじゃねえけど、金の有り余っている人じゃなきゃ

③施設のことがよくわからない

- ・施設っていうところはどこいうところ？本当わからなくなったら連れていかれるかも。でも施設っていうところをよく知らない
- ・他(公以外)に頼るところはないだから

④市の担当者の対応に腹が立つ

- ・調査（介護認定審査）して、その人たちが向こうに行って報告するわけだけど、報告しても何の返事もないってわけ、その説明が何にもないの
- ・市の介護課って言うけど介護しない課じゃねえかと思ってる、市役所の人 came ことがない
- ・市の人 came 説明したことがない。級が上がるにしても、下がるにしても
- ・こっちから連絡しても一方通行。返事がない。返ってくる返事はもういい加減。（説明してくれれば）納得できる
- ・去年の9月から、ベットを取り上げられちゃった。手すりがないと立ったり座ったり困る。その時も調査に来たのはパートの人
- ・一番気に入らないのは市の職員が一度も来ないこと
- ・前は三千元。今度は時間が少なくなって四千元取られる。負担金が、どういう人がどういう条件で決めるのかちっともわからない。説明があるのが普通でしょ。それで市の予算が二億円ばかり浮いたってね

衣食住

①ひとりでできる範囲で賄っている

- ・食事の支度もどうにかやっているんですよ。行き届かないですがね
- ・自分で（作って）食べる
- ・娘のところからこのベットをもらってきた。手すりがないと立てんから自分でつけてもらった
- ・今は家の中は杖を使って歩く、トイレに行くとかね
- ・食事は給食以外は自分で作るよ。ご飯煮たり
- ・できるだけ範囲でやってる
- ・食べるものもすくないでしょ。まあ十分

②ひとり気楽

- ・結局（子供のところに）行ってもね、お勝手をしてやらなくちゃならないし、帰りが遅くなるしね。自分じゃ、嫌なときはこれ食べてお終いにしようとか
- ・（部屋に）帰ってくるとほっとする。

③生活の縮小

- ・生活が小さくなった。
- ・自分で運転していた、内緒でね。最近、アクセルとブレーキを間違えるの。それで孫に車をやっちゃった

楽しみ

- ・息子がおしゃべり人形を買ってくれた。誕生日を教えてやるとね、「ハッピーバースディ」ってね。「お母ちゃん誕生日ずら」ってね。こっちのほうがわすれているのに、面白いですよ。総領が母ちゃんさみしいからって買って来たって。何か云うんですよ。この人(人形)がね
- ・やっぱしテレビだね。だいたい時代劇が多いよね
- ・あんまり趣味はないからね
- ・(楽しみは) 今ね、ちょっと(デイサービスに) 遊びに行くことだね
- ・普通はテレビがお相手。テレビを見て一日一日立って。楽しくもねえけど退屈だから
- ・公園で。毎日、毎日(ラジオ体操を) やってます
- ・懐かしい歌を懐かしんで楽しんでいます
- ・老人クラブでね、老大っていうのがありまして、そこでコーラスを月に2度しています。そういう楽しみもあります。お友達が順に増えていきますからね。だから、コーラスに行けばお友達もでるしね。それでね、錢太鼓今やっています

将来の展望

- ・(一番不安に思うことは)地震とか、そういうときが一番困る。気になります
- ・(家の真ん中に)テレビを置いて、つけて寝る。つけっぱなしだってこともある
- ・いずれは(養護老人ホーム) 行くんだけども空きがないんだって。なかなかね

<研究目的②>

1. 高齢者支援組織との交流会実施状況

1) A 町（過疎地）

日 時 : 平成 19 年 12 月 13 日（木）15:00～16:30

場 所 : A 町総合福祉センター

参加者 :

A 町高齢者支援組織（14 名）

＊民生委員協議会 会長

＊愛育会 会長

＊食生活改善推進員会 会長

＊老人保健施設及び病院 院長

＊居宅介護支援事業者 所長

＊社会福祉協議会 局長・ホームヘルパーリーダー・デイサービス相談員・サービス調整会議担当

＊A 町役場福祉保健課 課長・障害担当・介護担当・保健師

県立大学プロジェクト研究 少子・高齢化メンバー（8 名）

＊看護学部 林正、流石、村松、河野、郷、藤巻

＊国際政策学部 波木井

＊人間福祉学部 伊藤

見学者（1 名）

合計 23 名

<次第ならびに担当者>

総合司会・進行	林正
15:00～15:05 あいさつ・開催の趣旨説明	流石
町側よりあいさつ	福祉保健課 課長
15:05～15:15 A 町の概況説明	福祉保健課 保健師
15:15～15:20 高齢者へのインタビュー結果（交流会への導入として）	流石
15:20～16:20 高齢者支援組織との交流会～わたくし達になにができるか～	村松・河野
16:20～16:25 まとめ	林正
16:25～16:30 閉会のあいさつ	波木井(地域研究部門長)

<当日担当>

記録（MD・IC レコーダーへの録音も含む）	郷・藤巻
写真撮影	伊藤

(1) あいさつ・開催の趣旨説明：流石

山梨県立大学の3学部合同のプロジェクトチームが、高齢者が住み慣れた町で本当に最後まで、安心して住み続けられることを目指して研究に取り組んでいることが説明された。この研究で、A町在住の20人弱の後期高齢者にインタビューを行い、日頃生活している中での思い、悩み、楽しみなどを聞いたが、このような当事者の声を手がかりにし、高齢者を地域で支えておられる組織の方と一緒に、今後のネットワークの構築を考えていくことがこの会の趣旨であることが説明された。

また、今回の調査や交流会の実施にあたり、A町福祉保健課課長や保健師等が調整役を担ったことが伝えられ、交流会への参加をしたメンバーへの感謝が述べられた。

町側よりあいさつ：福祉保健課 課長

高齢者支援組織の交流会の出席者に対し、参加への感謝が述べられた。

団塊世代が高齢期を迎え、本格的な高齢化社会に移行していくなか、特にこの町は、平成18年12月1日現在の高齢化率が47.8%と県内で最も高く、今後さらに増加傾向と推測されていることが述べられた。また、この交流会に先駆けて行われた調査の結果報告を受け、町としては、一人暮らし老人等についての福祉を重点とした行政が最優先に、地域の特性を活かした高齢者へのきめ細かな支援や今後の福祉の充実をはかっていくこと、住み慣れた地域で安心して日常生活が送ることができるよう組織作りや支援体制の整備の必要性を感じていることが話され、この交流会で、参加者の率直な意見を出し合って、成果のある交流会となるよう、協力の依頼がなされた。

(2) 町の概況説明：保健師

A町の概況について説明があり、以下の点が補足説明された。

- ・面積は北杜市に続いて第2位である。
- ・最近の高齢者人口割合は48%前半で続いていたが、11月に7人の転入（高齢者ではない）があり、その影響を受け、現時点の値は47.8%となっている。
- ・（H19.5のレセプトより）医療費順をみると、1位が循環器系疾患、次いで悪性新生物、3位が消化器系疾患となっているが、例年では循環器系疾患はあがってこない。今年はこの時期に心臓手術を受けた住民がいたため、その影響を受けていることが考えられる。
- ・平成18年度の地区別開催回数と参加者数の、「その他」とは、少人数の地区が合同するなど、分類できないものである。実施にあたっては、愛育会、公民館長の呼びかけや老人クラブの協力を得ている。

(3) 高齢者へのインタビュー結果の紹介（交流会への導入として）：流石

17,8 人くらいの 75 歳以上の一人暮らしと高齢者夫婦世帯の方へのインタビュー結果について以下のような説明がされた。

- ・「A 町での生活が一番いい」の中身では、長くやってきたお百姓を本当に楽しみにしている様子が窺え、調査時にも里芋や山芋など様々な作物が植えてあり、それを自分達で収穫し、また、人にあげる喜びを感じている様子を目の当たりにした。
- ・「ここ（A 町）で働き、ずっと住み続けたい」という思いを抱きながらも、高齢になり様々なことに自信がなくなってくるような思いを語っており、「別居の子供や親戚を頼りにしている」という思いも、多くの高齢者から聞かれた。
- ・「近隣同士が、お互いに助け合っているから安心だ」という思いは、都会にはない助け合いというこの町の良さがよく現れていると感じた。
- ・「町のサービスや農協はありがたい」では、移動販売車や農協、町のいろんなサービスがあるから、今はあんまり困らないということ話を話す高齢者方が多かったが、その一方、「年をとって年々体が思うようにならなくなりつらい」という気持ちも現れていた。しかし、「病気や怪我に注意しながら生活している」や、「生き方・ところがまえ等」にあるように、高齢者なりに様々なこと（認知症予防のため日記・年賀状を書く、地域での役職を請け負う、役割を担うなど）を実施し、対応策を考えていることも窺えた。
- ・上記のような工夫をしながらも、ほとんどの高齢者が「〇〇が心配・悩みだ」という事を語っており、災害や公共交通機関の不便さ、近所に段々人がいなくなることや空き家が沢山あること、村の行事（組長や祭りごと）が負担となることなどが語られていた。

また、この調査では、高齢者本人へ調査を実施したが、「高齢者本人の声」というのは研究のデータとして数少なく、その意味でも、貴重なお話を伺ったと思っていること、保健師を通し、高齢者の方から「また来て下さい」との伝言を聞き、調査者自身も高齢者の方から、お元気をもらったり、癒されたりというように感じた調査であったことも報告された。

(4) 高齢者支援組織との交流会 ～わたくし達になにができるか～

司会

住民の代表で参加しているメンバーに調査結果についての感想を問う。

住民：愛育会会長

調査結果の内容は、愛育での活動の中でもよく耳にする内容であった。月 1 回の健康相談を違う地区同士でお互い協力しあって開催しているが、先日の開催時は 15,6 人が集まった。健康教育、血圧測定、健康相談の後、お茶のみ会を行ったが、高齢者にとって

は、これがとても楽しみとなっている様子で、昔話をしたり、悩みを話したりしていて、なかなか解散とならなかった。このことから、地域での集まりが本当に健康につながっていることを感じた。

住民：食生活改善推進員会会長

食改推員は習ってきた料理、健康、病気、症状について伝達講習として各集落に伝えていくことを保健師の協力を得ながら行っているが、この活動の中で、高齢者が寂しい気持ちを抱いていることを感じる。また、夫婦二人揃っていつまでも元気であれば良いが、男性が一人になったときに、何とか暮らしていけるよう、食改では男性の料理教室を実施したが、良い結果であった。ある程度の年齢になり、足腰が弱くなると子供のところに連れていかれることがあるが、本当に悲しいと思う。住み慣れた土地に最後まで住めるよう、この方面でも保健師とも協力して食改の活動を進めていきたい。

司会

子供と同居しないで生活するのにはどんなことがあれば可能か、あるいはどんなことが不安なのか？自身の意見及び住民の声を聞かせて欲しい。

住民：食生活改善推進員会会長

自分自身が怖いと思うのは、世相激しく物騒になったため、夜の戸締まりなどを何度も確認するようになった。もう一ついつも感じていることは、高齢になって、共同で生活していく場面があればと思う。例えば、ご主人を亡くした人達が共同生活をしながら、時々自分の家へ帰ったりし、ちょっとした町の仕事に携わったり、ゲートボールなどして寂しさを補いながら、生活できればと思う。外に出歩かないと、会話が本当に単純化されるので、その辺をうまく解決できる方法があればと常に感じている。

司会

ヘルパーの立場で、上記のような住民の声を聞くことはあるか？

社協 ホームヘルパーリーダー

共同できる生活で、高齢者、各自が得意なことを役割として担いながら生活していくことも良いと思うが、訪問先の利用者は、やっぱり自分の家が良いと言っている。高齢者には、「自分の地域を守っていく」「大事にしたい」という思いがあるように感じるので、「集まる場所を提供する」という感じなら受け入れられると思う。

司会

保健師の立場ではどう考えるか？

保健師

このような話は以前にも提案されたが、共同生活を望んでいる人がどの程度いるのかということで、話が中断していた。実際には、自分の家が一番良いという高齢者の声を多く耳にする。また、高齢者と言っても、幅は広く、共同生活に適応できる人と、なかなか生活を変えることができない人もいる。大きな集落では、高齢者が自分の生活リズム

ムのなかで自由に共同生活の場に行き、特に決められたメニューをするわけではなく、その場の生活を行うということを実施しているところもあるが、住民だけではやりきれない部分がある。

司会

まとめ役などを行政が担うような話があったのか？

住民:愛育会会長

実施段階になると、空き家の問題や、責任者・まとめ役などの問題が生じ、現段階では、足踏み状態になっていると思う。

司会

高齢者の共同生活の場について、今までも話が出ていたようだが、行政として難しかったのはどんな点なのか？

福祉保健課 課長

空き家の実態調査をしたが、空き家があっても、週末は帰ってくるという様な場合は、共同生活の場として借りることは困難である。経済や社会の維持という点では、若年層若い人に来てもらおうというのが一つのねらいとしてある。

以前にも、共同生活のために、少人数の集落に他集落へ来て共同生活をしてはどうかと打診したが、「私達は、ここに生き、ここで住みたい。ここでずっと生活すると。」という反応であった。これから、年々高齢化が進んでいく中で、行政としても、集落再建、合併・合流というようなことも避けられないのではないかと、もう少し早い段階で取り組んでいても良かったのではないかと考えている。

司会

行政の方でもいろいろ工夫してきた様子が伺えるが、住民と行政の間にいる民生委員としては、どうしたら共同生活の場を作る話が進むと思うか？

住民：民生委員協議会会長

この町では部落が点在しており、そこに、老人が生活している。この状況で、高齢者が集合するためには、送迎は必要となるし、この役割をボランティアでやるか、業者にすることが、一番問題になる。また、高齢者の中でも年齢差があり、すぐに共同生活に馴染めない場合もある。

司会

例えば、「お題目」という形で集合する機会を作ると、その時は皆が集まりやすいということはあるのか？

住民:民生委員協議会会長

自分の部落でも、月の一日のお題目では、70代、80代の人が多い時は16,7人集まり、その後に茶話会なども行っている。その茶話会もお茶の準備が当番制になっており、近所との付き合いという理由もあって、参加している面もある。

司会

そうするとそこへ行きにくいと言うこともあるのか？

住民：民生委員協議会会長

私も努めて、そのお題目へは参加している。

司会

参加者の年代に幅がある場合、年代のそれぞれが自由にきままに参加しているのか？

住民：民生委員協議会会長

殆どの 70 代はとても元気であり、それを老人として認めると、80,90 の人達が、やる気なくなる。昔気質の人は、「頂いたら返さなければ」という気持ちがあり、それが金銭的にも負担となることもある。

司会

ここまでの話で、70 代でまだ元気な方には、役割を担ってもらうことが出来るのではないか、また、少しの介助と移動手段があれば外出が可能という人もいるが、人との交流を望んでいない人もいる。高齢者それぞれの希望や生活パターンを大切にしながら、自由に集まれるような支援っていうのは、困難なのか？

福祉保健課 課長

町には現在集落 36 あるが、行政としては、現在 7 集落でサロン教室を開催している。もっとそれを増やしながら、交流の場、または話し合いの場を多く持っていけるかもしれない。

司会

社協の立場で、これまでの話に対する意見はあるか？

社会福祉協議会局長

以前は、週に 1 回、男の人で 85 人ぐらいの人数で集まり、時にはお酒を飲みながらいろいろ話をしたり相談したりする場があった。また来年になったら、このような活動をやって、子どもや高齢者の環境を考えていきたいと思っている。

司会

デイサービスでは、来ている人も、来られない方もいると思うが、担当者としては、今までの話を聞き、どう思うか。

社協デイサービス相談員

高齢者を見ていて、ここへ住み続けたいという気持ちがあるのがよく分かる。共同生活できる場所があれば良いと思った時期もあったが、いざそれをやるとなるといろんな問題が出てくる。独居老人を見てみると、少しの手助け（薬の世話や、電気のコンセントを入れるなど）があれば、この先も在宅生活を継続出来そうな人がいる。町全体ではなく、地区の問題として、地区で隣近所の方がちょっとお世話するというのが本当に必要ではないかと思う。

司会

近所で、日常生活のことを手助けする人材があると良いが、そのような人達がだんだん亡くなって行ってこの先不安だという声をきいた。ボランティアなどの若い人がいれば、このような手助けもできるが、地区によっては難しいのではないかな。

福祉保健課 課長

声掛け運動というようなことで、今現在、声かけ運動員が 77 名いるが、何かあったら声かけてもらえればとか、例えば何にもなくても 2 日に 1 回見守るというような活動もある。

司会

生活の中に入り込んで、家の中に入っていきような手助けは、信頼関係が基本となる。そこは住民同士で行うか、行政に依頼することになるが、このような少しの手助けがあれば、在宅生活は可能であるのか。

社協 デイサービス相談員

近所の人も大変だが、もうちょっと誰かが入り込んで手助けしてあげれば、高齢者は助かるのかなと思う。

司会

ヘルパーが入る程度ではないが、ちょっとした手助けということが必要である。

住民 愛育会会長

直せる範囲のことだったら、電気の場合は近所の〇〇電力を退職した方に、水道の場合は、水道組合の組合長に、あるいは、区長さんに連絡とって対応してもらい、難しい場合はいつも依頼している業者に連絡をとって、来てもらったりしている。

司会

自分で連絡できる場合は良いが、お年寄りの方は、頼んだら悪いなどの気兼ねがあるのではないかな。

住民 愛育会会長

そのようなことはないと思う。

社協 デイサービス相談員

もう少し真に迫ったところで、例えば、独居でいるか、いられないかの瀬戸際となった時、子供の方は、自分の所へ連れていきたいが高齢者の方にその意思がない場合が問題である。

司会

高齢になって、自分で出来ることが少なくなり、誰かに連絡をする事や、その判断、書類を書くなどのことが、難しくなったときの事はどうか。

福祉保健課障害担当

生活の面での困ったことを明確にサービスとして行政が行うのは、24 時間職員がいるわけではないので難しい。私自身、一住人として近隣の高齢者が困っているのを助けたりしたし、振り込め詐欺があった時も未然にふせぐことが一回あった。地域住民として、支援していくことは可能と考える。このような支援を地域住民に周知することは行政の役割となる。

司会

振り込め詐欺など、高齢者や認知症を持っている人をターゲットにした犯罪を回避するためにも、もうちょっと地域の身近な中で支援できればと思う。地域の中核病院の院長として、住民の方が機能低下するなかで退院し地域へ戻られる時に、感じること・考えることはあるか？

介護老人保健施設・病院 院長

病院から退院し、地域に戻れるかどうかは同居家族や介護者がいるかどうかによるが、これは、他人がどうこうする問題ではないと思う。できれば、在宅生活ができるに越したことはないが、現実には、かなりシビアである。10 年前、老健ができる前に、町の各集落と、老健を利用して、どうにか A 町に住み続けることができないかということ話を合ったが、最後の所にくると、たぶんだめだろうという人達が多かった。長期まで在宅でという話になると、往診や訪問看護、ホームヘルパーを入れても、結局、子供達としては、どこまで専門職ができるのか、どこまで責任を持てるのかという話になり、なかなか難しいと感じた。また、それなりの病気も持っていた、「在宅生活」というのが目標になっている場合は、医療面では命の長さを確保するのが問題ではなく、本人と介護する家族が納得できる治療が優先となる。しかし、この問題も難しいものである。自分達にできることを考えた時、家族の代わりはできないかというところが私の素直な意見だが、家族がいなくなるというのが高齢化なので、かなり難しい問題である。

司会

家族とは同等とまではいかないが、家族に近いような支援の役割やシステムがあれば、なんとか在宅生活が可能になることもあると思うが、例えば、医療の部分だけではなく、財産や家の管理など、家族に代われない部分も心配しているのか？

介護老人保健施設・病院 院長

そのようなことは、ほとんどない。実はその成年後見制度を利用している人は、時間とお金もかかるため、本当にわずかしかない。私は町内に出張診療所をいくつか展開しているが、住民の数がどんどん減っており、受診者の数も一時期よりずいぶん少なくなっていることも事実である。そうすると、高齢者の世話を担う人、一人あたりの負担も大きくなる。また、別居の家族が自分たちのところに連れて行くという話になれば、それ以上踏み込むことはできない。これは、この町だけではなく、近隣の町村など

も同様である。これまで「うちでみてくれる人がいれば、その方を助けるっていう形で、協力したい」という心温まる、我々の心を刺激するような人達にたくさん出会ってきた。近隣住民は「役に立ちたい」といつでも思っているわけです。24 時間、365 日そういうことをやろうと思って、実際にやっているが、それでもやっぱり最後の所はですね、やっぱり家族の代わりはできないと感じる。

司会

この問題はこの町だけではない。ここでの取り組みが、県のモデルとなると良い。

介護老人保健施設 院長

「地域のコミュニティ」という言葉を聞くが、まだ、ここにはそういうものが存在するのだと思う。例えば、過疎も乗り越して殆ど何もない所で生活している人が、一人で亡くなったことが、この町でもあるが、「最近見かけないけがどうしたのか」と住民が気づいたため、発見されたのはせいぜい 1 日か 2 日のうちであった。逆に、都会で人口が多くても、大きな団地で核家族化してしまったところは、近隣同士が無関心の状況でありもっと問題となっている現状もある。この町は近隣のつながりがあり、良い所だと思うが、実際には近隣住民にかかる責任の大きさも感じている。

司会

この町には、人とのつながりという素晴らしいことがたくさん残っており、個別の生活をしながら、お互いに声を掛けあい助け合っている。いろんなサービスの導入が必要な方々に接しているケアマネの立場から、今の話を聞いて、何かご意見あるか？

居宅介護支援事業所所長（ケアマネジャー）

地域の中で、生活される方達が減っていくのは、独居の高齢者を、別居の家族が自分たちのところへ連れて行ってしまうのが原因ともなっている。このことについて、過去に専門職間で話し合ったが、公的なものでなくても、隣近所の声掛けがあったら、独居生活が可能となるのではないかという結論になった。本日のような交流会が開催されたのだから、モデル事業として、「日中は誰もかれもがみんなヘルパーさん」というような取り組みをしていただけたら嬉しく思う。他の地域で、「自分の親が一人で暮らしていて、当たり前だ、たいしたものだ」という家族がいたが、それは一人で生活できるわけではなく、地域の人達に見守られているからやれるということを、家族は知るべきである。この町の人達は、近所の人達に頭を下げながら、「うちのおかあちゃんいられるのは、みんなのおかげだよ」と言っており、このような人達は幸せに生活できていると思う。幸せな笑顔があふれる人達が増えてくれれば、私達も仕事していて楽しい。公的な機関はもちろんだが、社会福祉協議会に全面的に取り組んでいてもらいたいと思う。また、地域の協力のもと、住み慣れた場所で最期を迎えられるという成功例があれば、住民にも自分も同様の最期を送れるのではないかという気持ちになってもらえると思う。このようなことが実践されれば、「じゃあ、おばあちゃん一人でも寂しくなかったな」と

という言葉が別居の家族からも出てくるのではないかな。こういうことを町で、やっていただきたいし、協力していききたいと思う。是非このようなことの発信を、この町からしていただきたいと思う。

司会

とても、貴重なご意見をいただいた。

住民 食生活改善推進員会会長

自分の部落に、アルツハイマーで独居の人がいた。息子は別の市街地に住んでいたが、「おかあさんアルツハイマーで心配だから」ということで、午前、午後に担当を分けて近隣住民が様子を見に行きながら生活を支えた。その時、自分を含め近隣の3人がヘルパー3級をとった。その家の入り口には日誌が置いてあり、次の方に伝言を渡すようになっていた。みんなで助け合ってみていければ、アルツハイマーの方もここでの生活を続けられたという事例をこの場で伝えたい。

司会

素晴らしい事例である。住民の立場からで、感想があったら、お願いしたい。

社協サービス調整会議担当

この事例の話だが、その人の生活を支えるために、一回行く所を三回に分けてみんなでまわったりするなど、制度上やってはいけないぎりぎりの所まで工夫をしながらその人の生活を支援したい思いで支援してした。今話したような近隣同士の助け合いは、そこに住んでいる人が昔からやっていたことだが、“ボランティア”とか、“組織の一員”ということになるのかが疑問でもある。「組織を立ち上げてくれ」と言われても、そういう問題じゃないと思うし、何かそこで引っかかって、会を立ち上げることに二の足を踏んでいる感じもある。また、自分は若い方なので、私達に何でも言ってくれればいいなともいつも思っているが、この思いを、自分達が高齢者に伝えていかなければいけないとも思う。私達の年代の人達は、いつでも頼ってもらえるような人間になる必要があるし、自分が高齢者になった時には、そういう人に頼れるのではないかなと思う。

社協 デイサービス相談員

地域での支援ではどれだけ一人の人に大勢の方が関われるかというところが、最終的には重要になると思う。

介護保険担当

自分はこの町で生まれ育ったが、隣のおばあちゃんにいろいろ世話を焼かれて、その時はうるさいと感じたが、現在では、あの時のおばあちゃんは大丈夫かなというふうに高齢者支援を考えられる。このように、小さい頃からお互いに助けていくという意識があれば良いのではないかなと思う。また、住民だけでできなければ行政の出番が来るというようになっていけば良いのではないかなと思う。

司会

このような若い方がこの町を支えている現状が窺えた。保健師から最初に概況を話してもらったが、もう一度意見をお願いしたい。

保健師

平均年齢が七十後半みたいな地域では、“声を掛けてもらえれば”といっても、それができない場合もある。そういう人達にはこちらから出向いて行けるようなシステムを作ってくのが必要と思う。また、「こんな場合はここに連絡すると良い」というようなものがあったら良いと思う。この町にいと、ここの良いところはなかなか見えないが、外部の人には、地域のつながりがあって、ここの人達の生活が支えられているということをいつも言われる。健康相談などに行った際は、住民に「みんながやっていることがとてもすばらしいらしいよ」、と伝えていき、一人一人が元気になっていけば良いのではないかと思った。

司会

住民、行政、地域の役割など、検討を続けていけると良いのではないか。

総合司会

調査の時にも本日の交流会でも、住民のつながりを感じ、感動している。自分の郷里も、過疎化が進んでおり、そこをどのようにするかということを、考えながら、参加していたが、日本全国に共通するものは国の施策で行うとしても、一つ一つの地域においては、その住民自身が、知恵を出し合って、協力していくということが大切になることを再認識した。隣近所の助け合いが活かされれば、何とかできそうな気がする。

(5)閉会のあいさつ:波木井

プロジェクト研究と交流会の成果について、以下のように話された。

県立大学では地域研究交流センターという組織を作り、地域に関わるいろんなテーマで、いくつか研究を行っているが、地域に入り、住民の生の声を聞き、地域に貢献していくことが県立大学の方針でもある。この交流会も、その一貫であったが、本日は活発な意見や、この町の特徴をうかがうことができた。プロジェクト研究の役割は、ここでの意見に看護や福祉の専門的なことを加え、この町のいいところや、それがどういった県内に伝わっているかということを、報告書などの形で、発信していくことである。このような方向で、この交流会を、役立たせていきたいと思う。

最後に、多忙な中、交流会への参加をしたメンバーへの感謝が述べられた。

2)B 市（市街地）

日 時 : 2008 年 2 月 19 日（火） 15:00～17:30

場 所 : 山梨県立大学（飯田キャンパス 6F サテライト教室）

参加者 : B 市役所 高齢者福祉課（1 名）

B 市市議会議員（1 名）

B 市社会福祉協議会（1 名）

交通関係企業（1 社 1 名）

福祉サービス提供事業者（4 社 8 名）

B 市 C 地区地域包括支援センター 保健師（1 名）

地域住民（地区民生委員、自治会会長含）（8 名）

県立大学プロジェクト研究 少子・高齢化メンバー（11 名）

人間福祉学部 小野 横山 伊藤 城戸

看護学部 林正 流石 村松 河野 郷 藤巻

国際政策学部 波木井

合計 32 名

＜次第ならびに担当者＞

総合司会・進行	林正
15:00～15:05 あいさつ・開催の趣旨説明	小野
15:05～15:15 B 市の高齢者を取り巻く概況説明	地域包括支援センターC 保健師
15:15～15:25 B 市の高齢者へのインタビュー結果（交流会導入）	横山
15:25～16:30 交流会 ～私たちに何ができるか～	伊藤・横山
16:30～16:35 まとめ	波木井
16:35～16:40 閉会のあいさつ	波木井（地域研究部門長）

＜当日担当＞

受付	村松・郷・流石
記録	城戸
写真撮影	藤巻

(1) あいさつ・開催の趣旨説明：小野

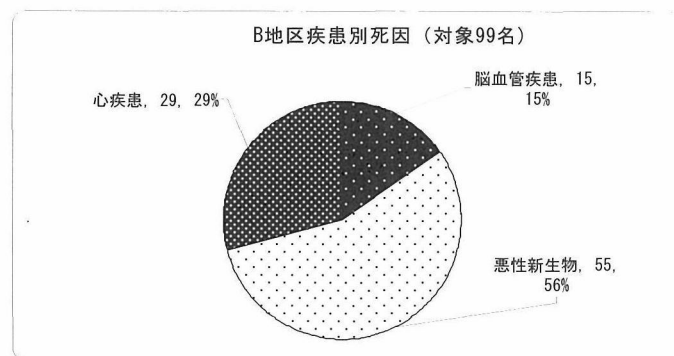
山梨県の高齢化は深刻な課題である。全国をきってトップであり、まさに今までになかった時代を生きており、私達にとっても大変大きな課題である。このプロジェクトは、3年目を迎え、1年目に行政現状調査、2年目にNPO法人等の高齢者支援組織の現状調査、3年目の今年度は夫婦世帯、独居世帯の高齢者を対象にインタビューを行った。本会はインタビューで聴取した高齢者の生活状況、生活の中での不安、困っていること、楽しみなどの逐語録を基にし、地域で日頃、高齢者に関わりのある参加者の方から率直なご意見を伺うことで、今後の支援に活かしたいという趣旨であることを説明した。

今回調査協力いただいた地域住民の選定と調整のために、B市地域包括支援センター保健師の協力があったこと及び少子高齢プロジェクトチームメンバーの紹介を行った。

(2) B市(市街地)概況説明

B市の概況説明が以下のようにされた。

- ・平成18年4月にB市では地域包括支援センターが日常生活の圏域毎に10ヶ所設置されている。
- ・地域包括支援センターCで担当している地区は、3地区（イ・ロ・ハ）で構成されている。
- ・3地区の人口、世帯数は、年々減ってきており、1世帯に対する人数は2.1～2.32で高齢者世帯、核家族世帯が多くなってきている。
- ・出生状況につきましては、B市と比較すると3地区とも年によって差はあるが、B市全体と比べると子供が産まれる数は少ない地区である。
- ・死亡状況については、平成18年に3地区の死亡は183人である。そのうち99人が3大疾患で死亡している。内訳は1番が悪性新生物30%で55人、2番目に多いのが心疾患16%で29人、3番目に脳血管疾患8%で15人である。



- ・B市全体と比べると、高齢化率、後期高齢化率ともに高く、高齢者人口は確実に増加している
- ・介護保険の認定者数は、要支援1から要介護5まで、2月1日現在、65歳以上人口4,394

人の内 819 人の方が介護認定を受けている。

- ・ 3 地区ともにそれぞれ地区の人口の様子が異なる。イ地区は新旧の居住者が混在していて、古き良き地域の環境が残っているところと、集合住宅などで近隣関係が希薄なところとがある。生活保護受給者、障害者、要介護高齢者、要援護者が多く居住の地区で福祉の課題を多く持っている。ロ地区は核家族も多く高齢化率は比較的低い。地区内の西側は終戦後から居住している高齢者が多く、東側は開拓分譲地による新興住宅地である。ハ地区は、市街中心部や中央線沿線には戦前から居住している高齢者、同居や老夫婦世帯が多く、高齢化率も高いため介護や経済的な問題が多く、地区内でも生活の格差がある。
- ・ 地域包括支援センターC では毎月約 160 件のプランを作成している。
- ・ 介護保険申請をして要支援 1、2 認定後、サービスを利用しない方が増えている。理由としてお守り申請になったり、いつか使うのではという不安感があるのではないかとと思われる。
- ・ 予防相談は、4 月から件数では 351 件。大半は介護保険サービスに関わる相談である。内容は代行申請、認定結果によって対応すること、委託介護支援事業所紹介、生活保護、障害者福祉に関わるケース対応、配食サービスの利用相談も増加している。
- ・ 虐待や権利擁護、成年後見に関する相談も段々と増加している。虐待ケースは B 市役所と連携して施設に保護したケース、相談のみのケースで 4 月からは 2 件であるが今後増えていく、また自分達のところに入ってきていない潜在的ケースがあると予測している。
- ・ 権利擁護も手続きや説明するが、実際に制度を利用するまでには至らない。

(3) B 市 C 地区の高齢者へのインタビュー結果紹介（交流会導入） 横山

今回、C 地区の 10 人の高齢者が対象であった。5 人独居、5 人は夫婦世帯であった。実際に自宅の方に伺うと、最初は「こんなじいさんの話を聞いてどうするんだ」等の発言があったが、中には 2 時間近く話をされる方もあった。日常の上で、どんな点に不安を感じているかということをお互いに交えて語っていただいた。特に質問等を定めて聞くというのではなくお年寄りの方からご自身の言葉で語っていただくということを目的にインタビューさせていただいた。逐語を録音し、全て文字に残し分析している。全ての分析が終っていない状況であるが、概略をまとめたので紹介する。

インタビューの概略(横山)

インタビューは 4 名の教員が担当し、実施した。表現方法はなるべくインタビューさせていただいた方々が表現しているようないわゆる甲州弁の表現も入ったままでリアル感を出している。「健康」、「人間関係」、「経済」、「福祉サービス」、「衣食住」、「医療職との関係」、「楽しみ」、「将来の展望」の 카테고リーに分類ができた。

〈夫婦世帯高齢者インタビュー結果〉

- ・一番多かったのは健康状態に関する思い、考えだった。夫婦世帯の場合の健康状態で特徴的なことは「常時体に痛みを感じたり、病気の治療を続けながら生活している」、「まあ健康で、どちらかは今のところ大丈夫ですよ」と言いながらどちらかが何らかの病を抱えながら、障害を抱えながら生活をしている状況にある。糖尿病である、心臓にペースメーカーを入れている、利尿剤を飲んでいる等、毎日何らかの薬を欠かすことの出来ない状況にある。内部障害を持ちながら生活をしている方、どちらかがそのような状況にある。
- ・それぞれ連れ合いがいるということで、お互いに何かを抱えながらも心配し合っているというところが特徴だった。
- ・お互いに思いやりながら、健康のことを気にしながらというような状況を伺い知ることができた。
- ・人間関係の夫婦関係というところでは、「お互い助け合っていると、まあ喧嘩もするけど、二人は安気がいいよ」と言っていた。
- ・今後考えさせられる発言として夫婦の間での思いや気持ちを言葉にすることが大切であることを5組のそれぞれの夫婦世帯の方達が述べていた。「言葉にしないと相手は何を感じているかわからない」、「今までは子供が沢山いたので、言わないで済んでいたけど、二人になってしまうと、どうしても表現しないと、言わないとわからない。ただ怒ってしまう」「感謝の気持ちのありがととか、そういうことを言うことによって、なんとなくうまくいっているんですよね」ってということなどである。
- ・親子関係ということで、ご夫婦世帯の中で一番出たのは、「娘が頼りですね」「娘がいてくれてよかった」というような、娘との関係が濃厚なことを感じた。
- ・親族関係では、「甥とか姪とかが来てくれますよ、たまには」ということであつた。
- ・地縁関係、いわゆる隣近所との繋がりには「それぞれが年をとってみんな年寄りばかりになってしまった」、「日々の味噌醤油を借りるような仲はだんだんなくなってきて、どういう生活をしているのかわからなくなってきた」との発言があつた。「無尽という付き合いはまだ続いていますよ、しょっちゅう行っていないですけどね」と地域地縁関係が結ばれているところもある。無尽という付き合いが根強く残っている。
- ・経済状況では、「税金や公共料金っていうのがだんだんと負担になってくる」「入ってくるものが少なくなって出るものが多くなる、これじゃあね」というようなことは結構皆さん平均して言葉にしていた。
- ・タクシーが今の生活の中で大きな移動手段でもあり、情報収集の手段でもある。結構タクシーの利便性を感じている。「お金はかかるんだが色んな情報は得られる便利な乗り物ですね」
- ・福祉サービスについて、これは健康状態に続いて一番多く語られていた。デイサービ

スはそれなりに利用されている実態がある。行く理由として話し相手が欲しいことが挙げられる。「家にいて夫婦でいたとしても、そんなに話はないよ」「やっぱり誰かと一言くらいは話したい」というところでデイサービスが使われている。

- ・ 相対的に良い時代だなんて思っていらっしゃる方の方が多かった。
- ・ 介護保険サービスは、融通が利かない。例としてヘルパーに来てもらっても「これをしてもらいたいんだが、それは仕事じゃないよ」と言われると強くも言えず、細かいところで、やってもらいたいこととサービスを提供したいってことが一致していないのは辛い。
- ・ 衣食住。生活全般っていうところでは、食べること寝ること食事に関して、準備が大変ということが共通項だった。「まあ夫が元気な場合には今まで家事をやったことがない」「それでまあ手習いでやり始めたけどなかなかうまくいくもんでもないし」という発言があった。掃除では家の広さが負担になることもある。
- ・ 医療職との関係では、関わった病院の先生達とのやりとりの中で、「年寄りの話を親身に聞いてくれる」「行けば行っただけで訳わからないこと言うだけけれども、聞いてちゃんと答えを返してくれる」。「どういってお医者さんとか看護婦さんがいると行くと楽しいよね」「私のことを受け止めてくれている」というような感覚が高齢者にとってとても大事であると感じた。
- ・ 楽しみと将来の展望では、特徴的だったのは、抱っこするくらいの大きさの話せる人形を持ってる方が多い。「その子に言葉を教えて、おはようなんて言われると嬉しいよね」。このことは会話がなかったことの辛さっていうのを人形という、思っていることを返してくれる対象ではないが声が聞けるっていうことをありがたく感じている方が多い。また、パソコンで将棋を行うなど今後の展望を感じた。
- ・ 将来の展望はお墓はすごく大事なキーワードであった。どこに自分の骨を埋めてもらえるか、どこに入るんだっていう、もう生前からここに入るんだってことがきちっとわかっていれば安心だということがわかった。

〈一人暮らしの高齢者へのインタビュー結果〉

- ・ 健康状態では内部障害にかかられている方が多い。一人暮らしのため「いつ倒れるかわからないということがとても心配だ」の発言が夫婦世帯の方からは聞かれなかったが、一人暮らしからは、ほぼ全員の方から伺えた。「声というか、音が無いから一日中テレビを付けてる、夜中まで付けている」というような寂しさがあることもわかった。
- ・ 人間関係では連れ合いのどちらかが亡くなっており、「なかなか心の整理がつかないの」で引きずっている」というようなことを大半が発言している。
- ・ 親子関係については夫婦世帯の方は娘が頼りであったが、一人暮らしは息子の話が中心だった。
- ・ 親族関係では、ご自身のご兄弟との関係を心の支えにしており、このことは夫婦世帯

からはあまり聞かれなかった。

- ・地縁関係では、やはり一人であるというところが「地域の方が結構目をかけてくれているんだなあって、それを感じている」、「実際に世話をかけている、ありがたいと思う」という逐語があり、夫婦世帯ではそれはなかった。一人暮らしであることが、地域の方がそれなりに目をかけてる地域もまだ残っている所であると感じた。
- ・経済状況は高齢者夫婦世帯と同じように「年金、それでも引かれるものは引かれるし、細々としたもんだ」という発言もあった。
- ・福祉サービスに関しては、デイサービスとかヘルパーを利用しているが、「行き始めると楽しいんだけど、行くまでが大変」の部分はどうクリアするかということがとても大きい。行き始めると皆さん楽しいと話したが、一步デイサービスに行くまでがやはり、皆なんとなく「行きづらいとか、出づらい」ということを発言していた。B市の対応に対し、不満もあり丁寧に説明することがとても必要なことであると感じた。
- ・衣食住に関しては高齢者の夫婦世帯と同じく「食べること、これは大変だよ」との発言があった。楽しみはテレビであり、一人暮らし世帯でも「おしゃべり人形買ってきてくれたよ」という発言があった。
- ・将来の展望で今一番不安なのが、「地震がねえ」「一人暮らしの身でいつ何時倒れるかわからない」という発言があった。

(4) 高齢者支援組織との交流会 ～わたくしたちに何ができるか～

司会

同様のインタビューを行ったA町と比較するとB市という市街地とA町は山間の人口の少ない地域の差というのがあると感じる。昔からの地域の繋がりがまだまだ強いA町とB市C地区もそれらは幾分残っているが、地域の中での世代交代が進んでいることが特徴的である。人との繋がりが重要なポイントと感じる。

インタビューの結果説明をふまえ、参加者からそれらについてのコメントを求めた。

住民：C地区高齢者クラブ

私自身も後期高齢者、妻も後期高齢者である。兄弟は三人兄弟で、みんな元気である。家内に死なれたらば、多分私の方も死ぬ・・・なんていつも思っており、家内に生きていてもらわないと困る。その代わり、そうすると何かしてやらないとならんと思っている。まあ助け合ってやろうということになって。大体、インタビューでは同じようなことを皆さん言っている。私だけが特別なそういうふうに思っていたがそうでもなかった。

住民：C地区高齢者クラブ

夫婦二人で、私自身が80歳、家内も後期高齢者である。各町内には自治会組織があり、組長が順番に回ってくる。組長の上に自治会長がいる。若い人は問題ないが一人暮らしの方、年寄り一人にも組長が回ってくる。組長の仕事は、忙しいわけではないが、広報

配布、地区の行事に率先して出なければならず、一番厄介で疑問に思っているが地区の運動会に組長となると年寄りの人でも率先して支度をしなければならない。年寄りの一人暮らしにはいかに負担になるんじゃないかと思う。自治会の組織と高齢の問題についてはこれから大きく変わっていく必要があると考えている。

住民：C地区高齢者クラブ

新聞受に新聞がたまっていて異変に気付いたケースの話があったが、それは私の友人であった。発見された後、救急車で搬送されたが亡くなってしまった。病気になった時、一番肝心なことは例えば心筋梗塞になった場合、意識がなくなり、自分では全然分からず電話をかけることもできない。それで考えたのは、一回、一日に電話を掛け合うか定まった時間に外へ出てくる等、そういうことをしてもし出てこなかったら「なんで出てこないんだ」とか、そういうことを考えている。ちょっと顔をみるとか声を聞くとか、何かそういう方法はないかと自分では思っている。この点をちょっと考慮に入れていただきたい。

住民：C地区高齢者クラブ

近隣の一人暮らしのお年寄りに地区毎にサポートしようという案を自治会長さんに申し上げたことがある。結果、「個人情報の問題があるから、なかなかそれは難しい」との返事もらった。そこで毎日連絡することや部落の組の中で「そういう人、こういう人がいる」と「それでこういう人は家事できないからお隣同士でよく看視し合おう」等、話し合いすることが個人情報になるのかと思う。ここをどう考えるべきか。意見を伺いたい。

住民：C地区自治会会長

昨年、長岡へ地震のお見舞いを兼ねて行ってきた。地震の体験をした方達の話の聞くと2度の地震体験があるのに3日くらいは行政その他の者が援助できないような状態になっている。インタビューにも地震があった時は不安、一人暮らしは不安の項目もあるが、やはりこれは地域で特に一人暮らしの会みたいなの、ある程度組織を作るべきじゃないかと考える。一日に一回、隣の一人暮らし、近所の一人暮らしをお互いに安否を気遣う組織というと硬くなるが、それを考えている。行政面、自治体とが一緒になり、真剣にこれは取り組まなければならない時期に来ているなと思っている。個人情報は、自分の身を守る為になるのであれば個人情報の件は仕方ない。やはり自分達は自分達でということである。最近悪い傾向でなんかって言うと市でやってくれない、県でやってくれないという傾向で頼るのも一つの方法だが「自分の家は自分で守らなきゃならない」、地震で、実際一人暮らしでダンスの下敷きになった時、誰か来てくれなきゃなんて言っていたらどうにもならない。自分でガッと起きないと出てこれない。そこから始まり、老人の一人暮らしの方もお互いに助け合いの精神をもう少し高めてもらい、自分ひとりじゃないんだなって、みんなが手を組んでいけば心配もだんだん少なくなるという風な方

向に行政的にも進めていかねばならない。

司会

ここまでは、イ地区の方からの意見を伺った。ロ地区の方の意見を伺いたい。

住民：C地区民生委員

私はロ地区のC町在住である。とても範囲が広い。民生委員として担当ケースは600件である。比較的、若い世代も多い。一人暮らしの安否確認をやっている。B市はふれあいペンダントというシステムがある。それは消防署に連絡がいき、消防署から関係のところに連絡するようなシステムである。また、一人暮らしの人は話し好きである。自立を促すことが自分達の役目だと考えている。私自身は夫と二人暮らしだが喧嘩ばかりしている。お互いにわがままが出てくる。しかし、この関係性がよいと考えている。

司会

ふれあいペンダントという話がでたので、どういうものかちょっと簡単に説明していただきたい。

B市高齢者福祉課担当

今日は、私自身は発言するつもりではなく皆さんのお話を伺うつもりで来た。ふれあいペンダントの紹介だが、通常家庭の電話機にひとつの子機を付け、その子機の中に「緊急」と「相談」というボタンが二つ付いている。警察署と消防署の対応があり、消防では緊急ボタンが押された、相談が押された、といった対応が若干違う。ふれあいペンダントの特徴は一人暮らしのお宅に設置する場合には近所の方3人に協力員をお願いすることである。協力員が、その方の近所付き合いの問題もあるが、民生委員に結構負担がかかっている。今、1,100台程度が市内に設置してある。毎年、50台の新設をしているが間に合わない状況である。需要に対応できず、現在3ヶ月くらいの待機者がある。一番長い方は半年近くお待ちいただいている。行政は予算が切り離せないため仕方が無い現状もある。B市で高齢者の事故が、去年一昨年と2件あった。ふれあいペンダントを設置している家庭だった。しかし、それらは実際、スイッチが切れていた、触れなかったということが判明している。安心でお守りになるというような話もあり、ペンダント自体は価値があると思う。メンテナンスなどのランニングコストが非常にかかるものであるため、行政的な面からもう少し工夫できないのかというのは日々考えている。

司会

せっかくそういう設備があるというところで、きちんとそれを活用するための方法をもっと考えるべきである。持っているのに押せなかった、あるいはスイッチが切れていて押したかもしれないけれど通報にいたらなかった等の事例は残念である。時間の関係もあるため、各組織から一言ずつ発言願いたい。

福祉サービス提供事業所(通所サービス・介護予防サービス・福祉用具貸与・住宅改修)

デイサービスをB市で2ヶ所、本社はF市にあり、福祉用具貸与と住宅改修を行って

いる。B市の中心街で、介護予防サービスとして、パワーリハビリマシン8台設置し、トレーニングまた機能回復のサービスを提供している。トレーニングをすると同時に利用者同士の会話を楽しむ、それは普通のデイサービスも同様、トレーニング半分、会話を半分、お茶を飲みながら会話なんかしている。機会があれば見学に来てほしい。

司会

デイサービスのスペースを開放することで大変面白い試みである。B市ではないが、小学校の学童保育と高齢者の集まる場所を一緒にして、小学生達と高齢者の交流を同時に図ることの取り組みをしている地区もある。

バス運行会社

C地区の中では、タクシー使用が当然多いと思っている。C地区は比較的、バス路線があるがタクシー使用が多い理由として、「バスについては停留所まで歩かなければならない、この間だけが嫌だ」「タクシーであると door to door 玄関を開けるだけでよい」「乗務員さんと一対一で話が来て、目的地まで行かれる」、「少しでも動かなくて済んでしまう」という部分がやはりタクシーを選ばれる一つの方法ではないかと思う。C地区は、市街地が近く、スーパーや公共設備がかなり近場にある。タクシーを使っても比較的金額としては上がらずに行けてしまうという面から、C地区においてはタクシー利用頻度が高い。県内のある地区は1日3本ほどしかバスが走っていないが「バス停までが歩いて2〜30分近くかかる、それでもバスを使っている」「週2回一日行く日を決めて行く」ことを実際現場で受けた。それらとタクシー利用するC地区の方々で若干違うが、少し離れた地区に居る人は積極的なんらかの形で周りの人に関ろうとしている。C地区の方より「バスを使って知らない人達と触れ合う」「何かの地域活動に参加してみる」という部分があるため、バス利用もC地区に於いて提案させてもらいたい。

弊社でゴールド定期券があり、60歳以上の方が月々9,000円からで、長年使うことによって最大6,000円値段が下がるシステムである。自社の一般全路線全線から乗り降り自由で、一ヶ月間使い放題になる。利用者は自分達の娘、息子、孫からこれを買え与えられたという方もいる。やはり「これを使って少しでも地域に出るようにしなさい」、「もちろん何かあれば私達が飛んで来るが、まずはこのバスを使って自分で動いてみてほしい」との子供達からの思いから、持っている方もいる。是非お願いしたいこととして少しでも何らかの形で私達に聞こえるように声を掛けていただきたい。地区から発信、どんな形でも構わない。具体的には実際、〇〇専門学校の路線バスを走らすことになったことがある。これは弊社が一方的にその路線で走ることを決定した訳ではない。周辺企業を含めた地域の住民が中心になってかなり働きかけがあり、実現した。具体的には「少し停留所まで遠いので、停留所を調整する」ということも可能だと思う。どうしても運行して欲しい時間帯については時刻改定や便を増やす等の対応が可能である。地域に関われる活動というものを現地で行えるように取り組みたい。

司会

地域の橋としてやはり公共交通機関というのは非常に重要であり、運転ができなくなっていく年代の方も増えていることから、いつまでも子供に毎日、お願いするわけにもいかないということがインタビューでも聞かれた。地域にある資源として「バスを活用すること」が企業としての収益増、使う側の利便性も上がるという方法がひとつ考えられるとお話を伺い思ったことである。

福祉サービス提供事業者の方から、お話を伺いたい。

福祉サービス提供事業所 訪問介護サービス

自立支援ということを心がけ、今、事業所として勉強している。長寿会や老人会の皆さん方が無尽、あるいは総会とか、踊りの練習、碁等、声を掛けていただければいつでも場所を開放しようということは順次対応させていただいている。K 事業所としては違うが先ほどの意見にもあった地震に対しての協力体制の意見として、地区毎の消防団にも協力する意向もあり、お声を掛けていただければよいと考える。

司会

消防団という視点は、全く今までなかったもので、地域にある組織に力を貸して、あるいは力を地域住民の方が逆にそれを機に消防団に介入することもあるかと思う。企業の地域貢献がすごく盛んになってきている。Y 交通社の意見の中でもあったように地域からの声をあげるということが非常に重要である。個人としてお願いをするということのも重要であるが、地区の高齢者クラブの声として「こういう路線が欲しい」、「この時間帯だと〇〇に間に合う」など具体的な提案は企業側にもメリットがある行為であると感じた。居宅サービス提供事業所の意見も伺いたい。

福祉サービス提供事業所 居宅介護支援

居宅介護支援事業所 S のケアマネジャーです。先ほど地震の話が出たが、災害は忘れた頃にやってくるのではなくて、災害はすぐにやってくるんじゃないかと自分自身も身の危険を感じた。S 事業所に契約利用者さんの中で障害者手帳保持者、独居で一人暮らしの利用者等、その方達にどういった災害が起きた時に私達は支援ができるかということころをケアマネジャーで考え、相談した。まず、そういった方達をリストアップし、ご家族にその辺をどういう風に私達が支援させていただいたらいいかということのお話をお伺いさせていただくことがあった。B 市の中では要援護者、そういった方達に登録をしていただくと、B 市の方でそれなりの対応をしていただくというシステムがある。申請をまずお勧めしようと思い、対象となる利用者に話をしたが、登録の申請書には協力していただける近所の方を 3 名ほど、記入して頂く欄がある。その辺を実際にご家族にお話しすると、「隣も高齢者、その隣も高齢者、支援していただける方がいない」という現状があった。民生委員にそのうちの一人としてお願いできるかと思ったが、やはりこれは地域の方で介護保険以外に支える地域のネットワークとして考えなければならない。

そこでリストアップした申請書を地域包括支援センターCの保健師に、まず民生委員の会に援護を必要とする方達の申請がスムーズにできるようにご協力をお願いできないかということ、今年に入り、地区毎の民生委員会の会合で自身の担当している地区の利用者に対しての協力を依頼している段階である。介護保険以外で地域の方達にとっても助けていただいているっていう現状がある。具体的に、過去において配食サービスでお弁当をいつも手渡しで渡しているが「その方の顔が見えない」ということで連絡をいただき、「これはちょっとおかしい」と思って近所の方が「この家はこっちの裏を回れば入れるよ」との助言があり、そのような形で入りましたところ、やはり倒れており、救急車を呼ぶ事態があった。また、夜遅い時間、「この時間いつも電気が消えてお休みになるのに今日は消えてない」ことから、なんかあったんじゃないかとの連絡をいただくというケースもあった。近所の方の繋がりや私達介護保険で支援させていただくケアマネジャーとの顔を合わせた中での連携、お互いに知ってる中で支援させていただくってところで今日私もこの会に参加させていただき、自分の顔はちょっと売っておこうという風に思った。

司会

ありがとうございました。

住民：C地区 自治会会長

ケアマネジャーの意見として支援者を難しく考えるが、この人はこの人の連絡係りという風なことで支援するという風にあまり堅く考えない方がいい。例えば介護が必要となった場合、隣、その隣の人が元気かどうか、災害時に安否を連絡する、「ああ、あの人がおかしいよ」ってそれだけでいい。支援者という名称に拒否感を抱くかもしれないが連絡係り、「私の安否はあなたが確認してください」、「あなたの安否はこの人」という風に3人くらいグループ的に、またグループが隣のグループという風に支援者、支援ってことにこだわらなくて、安否確認者という扱いをすればどうか。地区民生委員に任命された新しい方は特にやる気があることから大いに意見を述べてもらいたい。今回、I地区の場合は、回覧で民生委員の紹介をした。今までやったことがなかった上、回覧を見ているかどうかはわからないが、その地区の担当者は必ずこの人であるという、住所、番地、それから電話番号、私の場合は幼稚園の西の角、三軒目の南側等、具体的に書いて回している。地区ごとで新興住宅地などある所を含めると担当件数が異なるが、概ね150～200軒が担当である。自治会をまたいで担当している場合もあり、一自治会一民生委員というふうにはいかない。

住民：C地区高齢者クラブ

お互いに隣の者が隣の者知らなきゃ、それから隣に誰がいるか分からん状態になっている。民生委員の方に認定いただきたい、そういうことが大事なと。

住民：C地区 自治会会長

要介護4、5の方は誰かが連絡係、一番近い人が、やらなきゃならんと思う。支援じゃなくて連絡係りというふうな軽い気持ちしてくれるように、私共も仲間も、また会議でも伝える。困るのは隣近所で協力してもらえる方をお願いする時、隣の家の事情もわかってる、この家も一人暮らしだけどお年寄りしかいない、誰に頼んでいいかわからないっていう、その方達に、私も地域の中で、どういった方がご近所にいるかの情報がどうしてもあまりないが、その場合、民生委員に相談をして、この方ならお願いできるかもしれない、この方ならこの家のことを良く知っている、そういう情報をいただきB市の方に申請や地域住民の情報を提供するということが必要である。災害時にどうなるか不明だが、その方の安否確認をするのには、まずできることからやってみる、そういった制度があるよってことをお知らせしたい。

福祉サービス提供事業所 訪問介護サービス

B市2箇所の事業所がある。高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らせる支援を行っている。共同組合Yという高齢者を支援する組合で安心電話を始め、現在6,000名安否確認や相談を担当している。また高齢者の支援スペース提供を行っている。マージャン、太極拳、お料理教室等、各種のイベントで月1,000人ほどの高齢者の利用がある。時々ボランティアっていう形も行っている。資料で「デイサービスが楽しい」があったがひとつの行くきっかけが必要と感じた。

司会

ありがとうございました。社会福祉協議会からの意見を伺いたい。

B市社会福祉協議会職員

私は飛び入りでここに参加させていただき、貴重なお話を色々聞かせていただいた。今まで出たことは本当に今現実に困っていることである。センターや隣近所、世の中のみんなが本当に協力していただければ、本当に住み良い町になることを感じている。皆さんの協力を頂きたい。

司会

ありがとうございました。B市議会の方からの意見を伺いたい。

B市市議会議員

自身もC地区に在住している。移動手段がないことで、この会の参加のため何人かの参加者を乗り合いの形にして参加した。公共施設の立地条件が非常に悪いとも感じる。I地区は老人クラブや民生委員の活動も熱心である。全体的に個々に様々な形で支援をしているが、このように会し、どうなんだという機会がなく、特に地域包括支援センターについては事業の展開はあるものの継続的に行政が取上げてないのではないかと。行政にすれば財政的なものがあるが、行っているもの自体は比較的地域対応可能である。私は「B市の高齢者支援計画」をよく参考にしている。H20年度が今度見直しになるため、

是非、意見を反映し、B 市民に還元したい。これは作成が H17 年度、H18 年度からの計画に色々なアンケート調査も掲載されている。行政としても支援していかなければいけないと思う。

司会

どうもありがとうございました。貴重な皆様からのご発言、ご意見を頂戴した。最後にまとめと閉会の挨拶としたい。

(5) まとめ・閉会のあいさつ 波木井(地域研究部門長)

プロジェクト研究並びに交流会成果に対しての謝辞を述べた。

今日は大勢のお客様にお忙しい中お集まりいただき、感謝をしている。C 地区の住民の方々、企業の皆様、行政、社協、それから市議会の方と、それぞれのお立場から非常に貴重なご意見をいただいたことに対し、感謝をしたい。冒頭紹介があったがこの研究会も大学の地域研究交流センター組織の中で、大学と地域を結ぶ役割を担っており、大学としても教員が部屋の中で研究をするのではなくてやはりこのような形で地域に入り、あるいは地域の皆様と交流をしていくことで、他の声を聞いてそれを研究に反映していく、そういう形でこれから大学はやっていかないとなかなか難しいという責任を重々承知している。私自身は経済と金融の方が専門の視点から参加しているが、今日皆様方からいただいたご意見は県立大学には福祉学部、それから看護学部があり、それらの専門職が来年度以降になるが、意見などを分析して大学として発信をさせていくつもりである。本日の会合については3月中にこのプロジェクトの報告書として大学として、その発信をさせていただくつもりでいる。

引き続き、このような形で住民の方々と大学の教員が実際話し合い、生の声を聞く、聞いていくということは非常に大事なことだと思う。

今後も県立大学に皆様のご支援をよろしくお願い申し上げたい。

2. 人口過疎地および市街地における高齢者支援ネットワークの現状と課題

1) A 町（過疎地）

(1) 高齢者支援ネットワークの現状

A 町のひとり暮らし・夫婦世帯高齢者へのインタビューから得られた内容と、交流会での参加者からの発言より、以下のような高齢者支援ネットワークの現状が明らかになった。

＊ [] 内はインタビューの内容、または交流会での発言

A 町の**高齢者自身の状況**として、[百姓をして収穫物を人にあげるのが喜び]であるといった楽しみや生きがいを感じながら生活をしており、[ここでの生活が一番いい] [ここで働きずっと住み続けたい] と、A 町での生活を続けたいという思いを持っていた。一方で、[今元気でもいつどうなるかわからない] という健康への不安を抱いていた。これに対し、自分なりの生活のしづらさを予防する為の方策として、認知症予防のため日記・年賀状を書く、地域での役職を請け負うなどの対応を実施していた。また心配・不安なこと、悩みとして、災害、交通機関の不便さ、近所に段々人がいなくなること、空き家が沢山あること、村の行事への負担などが挙げられ、ここでの好きな生活をするにあたって様々な不安・悩みをかかえていた。

高齢者の**別居の子ども達や親戚との関係**は、[別居の子ども達が来るのが楽しみ] と良い関係が保てていた。また [別居の子どもや親戚を頼りにしている] と何かあったら頼ろうという気持ちを持っており、生活するにあたって困った時の支援を別居家族・親戚から受け、さらに心の支えでもあることが伺えた。

隣近所との関係について高齢者は、[隣近所で集まっておしゃべりをするのが楽しみだ] と交流を楽しみにしていた。また A 町では長年続いている「お題目」という地区の行事があり、月に 1 回隣近所で集まり行事を実施した後に、必ず茶話会を行っている。また [以前は週 1 回地区で男性が大勢集まり話や相談をする場があった、また再開したい] と高齢者自ら地区で定期的に無尽のような会合を呼びかけ、地区の様々なことについて相談したり話をする機会を持っていた。このような機会が定期的にあることにより、近隣との交流・繋がりが保てていると考えられる。また、高齢者からの [近隣同士がお互いに助け合っているから安心だ] という言葉や、交流会での [近隣住民は「役に立ちたい」といつでも思っている] [個別の生活をしながらお互いに声を掛け合い助け合っている] という発言から、A 町では隣近所との日常的な交流や見守りがあり、精神的あるいは生活上の支え合いが行われていることが伺えた。また、[認知症の独居高齢者を、近隣住民が様子を見に行きながら生活を支えた] という例もあり、何らかの疾患をもち生活上の支障があっても、ここ(A 町)での生活を続けたいという高齢者の思いを大事にしながら、隣近所で独居生活を支援するネットワークをつくり支えていた。

このように A 町は隣近所の繋がりがあり、共に生活するという昔ながらのコミュニティが存在していた。[この町の人たちは近所の人たちに頭を下げながら「うちのおかあちゃんがいられるのは、みんなのおかげだよ」と言っており、このような人たちは幸せに生活できていると思う]という言葉からも、お互いにそのことを認識し、家族に近い立場で近隣住民同士が繋がっていることが伺えた。このことは[この町は近隣の繋がりが良いところだと思うが、実際には近隣住民にかかる責任の大きさも感じている]という住民の言葉からも推察できる。

高齢者を支援する住民組織としては、民生委員、愛育会、食生活改善推進委員会等がある。共に自主的に或いは行政と協力して活動を展開している。活動例として、行政と協力して地区で健康相談を開催し、その後、参加者がお茶を飲みながら交流できる場を提供している。[その後のお茶のみが高齢者にとっては楽しみ、地域の集まりが本当に健康に繋がっている]という住民組織メンバーからの発言があったが、これは前述の高齢者自身の言葉である[隣近所で集まっておしゃべりをするのが楽しみだ]と一致している。そしてそのことが高齢者自身の健康に繋がっていることを、支援住民が実感している。もう一つの活動例として、[男性が一人になっても何とか暮らしていけるように「男性の料理教室」を開催]し、[良い結果が得られた]と住民組織メンバー自身が評価している。このように、地区の状況から必要と考えられる活動を住民自ら見だし、行政の協力も得ながら高齢者支援を実施していた。

民間を含む高齢者支援団体としては、老人保健施設及び病院、居宅介護支援事業者(介護保険)、社会福祉協議会等がある。具体的な支援としては、出張診療所(町内複数)、往診、訪問看護、ホームヘルパー等である。これらの支援団体は高齢者の身体状況・生活状況等に応じて、高齢者自身あるいは家族等の申し出により、個々に応じた必要なサービスを提供していた。一方で、高齢者への関わりを通して、[ちょっとした世話]のような高齢者への支援があれば、まだまだ一人で生活できる方もいるので、誰かに頼めるような、地区ごとの取り組みが必要ではないかという提示もあった。たとえばモデル事業として、地区の中で相互にヘルパーになれるよう研修会を開催する取り組み等も提示された。

行政の高齢者支援については、高齢者から具体的に[病院受診時の送迎][タクシーの補助]という移動に関する支援、[保健師の健康相談(愛育会・公民館長・老人クラブの協力あり)][年 1 回の健診]という健康に関する支援、[降雪時の除雪]という生活に関する支援が挙げられ、[町のサービスはありがたい]という感謝の言葉が聞かれた。この他にも[7 つの集落でサロン教室を開催]し、高齢者同士の[交流の場、話し合いの場]を提供したり、[声かけ運動員(現在 77 名)]による[声かけ運動]を実施していた。また前述のように、住民組織と協働して、住民の視点からの活動を住民と共に実施していた。また住民同士で集まるような声かけもするが、それを望まない高齢者もあったと

いうことから、各々のライフスタイルや地区の特性をふまえた、細やかな支援の必要性も伺えた。

このように A 町では、高齢者を中心として、家族、近隣住民、住民組織、高齢者支援団体、行政と、同心円状に支援ネットワークが形成されていた。中でも特徴的なのは、高齢者を取り巻く近隣住民の支援ネットワークが活きていることであった。また、家族・住民を支援の中心としながら、高齢者支援団体、行政はそれぞれの立場で、住民と共に高齢者を支えていた。しかし、病気になった場合や過疎化による相互の支え合いの低下によって、住み慣れた地域での生活の継続が困難となる為、A 町の保たれている現在のコミュニティ力を活かし、高齢になっても住み慣れた地域での生活を可能とするために、以下のような点が考えられた。

(2) 高齢者支援ネットワークの課題

A 町における高齢者支援組織との交流会において、幾つかの課題が浮き彫りになった。1 つ目は「高齢者が自由に共同生活する場」の存在である。多くの高齢者は「自分の家が一番良い」と言っており、また隣近所で集まって話をすることを楽しみにしている。高齢者にとっては自宅で自分のペースで生活しながら、気兼ねすることなく自分が話したい時に仲間と会えることが望ましいと考える。[「集まる場所を提供する」という感じなら受け入れられるのでは]と交流会で出されたように、そこでずっと生活するのではなく、自宅で生活しながら、気ままに仲間と話をしたり趣味の活動をする場を提供することができれば、高齢者の生活の質も維持できるのではないだろうか。実際 A 町では、[大きな集落では、高齢者が自分の生活リズムの中で自由に共同生活の場に行き、特に決められたメニューをするわけではなく、その場の生活を行うということを実施しているところもある]が[住民だけではやりきれない部分がある]と住民の自主的な活動だけでは負担が大きいことが予測される。また、今まで行政主導でこの課題に取り組もうと試みたところ、[実施段階になると、空き家の問題、責任者・まとめ役などの問題が生じ、現段階では足踏み状態]となっている。また、A 町では点在している集落があり、その地域特性から、ある程度の人数が集合するためには送迎が必要であり、送迎をボランティアにお願いするか業者にお願いするかという問題も表出してくる。これらの問題に対しては、住民(住民組織を含む)と行政が一体となってその課題の一つ一つに対して、住民ができること、行政ができることを明らかにしながら解決していくことが重要であろう。また、共同生活とは異なるが、高齢者同士の交流の場・話し合いの場を持つための方法として、行政では、現在 7 集落でサロン教室を開催している。今後、この数を増やすことも検討中である。

2 つ目の課題は「生活に関する些細な支援」である。これはヘルパーを利用する程ではない[ちょっとした手助け]であり、例えば[薬の世話や電気のコンセントを入れる

など]である。A 町内の様々な高齢者を見ている支援団体も「少しの手助けがあれば、この先も在宅生活が継続できそうな独居高齢者がいる」と捉えており、「町全体ではなく地区の問題として、地区で隣近所の人がちょっとお世話するというのが本当に必要ではないか」と提言している。また加齢に伴い「自分でできることが少なくなり誰かに連絡することやその判断、書類を書くなどが難しくなったとき」であっても、ここ(A 町)でずっと暮らしたいという高齢者の思いを大事にし、自宅で過ごせるような支援が必要である。行政としては、現在、声かけ運動員による声かけ運動を実施しており、「何かあったら声をかけてもらおう、または何もなくても2日に1回見守る」といった活動を今後実施していくことで、部分的に支えることができるのではないかと考えている。また交流会の中では「日中は誰もかれもがみんなヘルパーさん」といった取り組みを是非社協(社会福祉協議会)にして欲しい」という声も出された。これは具体的には、住民一人一人が隣近所のちょっとした支援をするという意識をもちそれを実行するということ、そして実行するにあたっては生活支援に関する知識を社会福祉協議会等の支援を得ながら学んでおくことであろう。このような支援が「少しの手助けがあれば、この先も在宅生活が継続できそうな独居高齢者」がそのままずっと自宅で生活できることに繋がっていくであろう。[生活面での困ったことを明確にサービスとして行政が行うのは難しい、しかし一地域住民として支援することは可能である、このような支援を地域住民に周知するのは行政の役割である][小さい頃からお互いに助けていくという意識があれば良いのではないか、住民だけでできなければ行政の出番が来るというようになっていけば良いのでは]という交流会での発言からまずは一地域住民として隣近所を支援していくことが大切であること、行政はそのことが実行できるように手助けしていくこと、あるいは住民だけではできないことを担っていく役割があることが確認された。また自分から「できないので助けて欲しい」と発信できる高齢者ばかりではなく、「声をかけてもらえれば」と言ってもそれができない」高齢者も存在している。このような高齢者には「こちらから(支援する側から)出向いていけるようなシステムを作っていくことが必要」である。

多くの高齢者は何らかの疾患をもちながら生活しており、時に入院・施設への入所などが起こりうる。このような高齢者が退院・退所後も変わらずA 町で過ごせることが望ましい。[家族に近いような支援の役割やシステムがあれば、施設から在宅生活が可能になることもあるのでは]という支援団体からの発言があった。[家族に近いような支援]を実際に担っていくことは非常に難しいと思われるが、昔ながらのコミュニティが息づいているその良さを活かした支援ネットワークが構築されることで、実現できるのではないだろうか。[地域での支援では一人の人にどれだけ大勢の人が関われるかが最終的には重要]であり、関わる支援者が個々バラバラではなく、支援ネットワークを形成しながら支援していくこと、住民・住民組織・支援団体・行政の支援者が、それぞれの立場でできることを考え、協働しながら高齢者を支援していくことが重要であろう。

2) B 市（市街地）

(1) 高齢者支援ネットワークの現状

B 市 C 地区の一人暮らし・夫婦世帯高齢者へのインタビューから得られた内容と、交流会参加者からの発言より、以下のような高齢者ネットワークの現状が明らかになった。

＊ []内はインタビューの内容、または交流会での発言

B 市 C 地区の状況として、B 市の平均よりも出生率が低く、人口が減少傾向にあること、高齢者世帯、核家族世帯が多くなってきていることなどが全体的な傾向としてあげられる。ただ、同じ C 地区内でも人口動態や生活状況の差が大きく、宅地開発によって新興住宅地が多く比較的若い世代が多いエリア、戦前から居住している住民が多く独居や夫婦世帯の高齢者が多いエリア、など地区の中でも状況が大きく異なり、古きよき近所づきあいが生きている場所や、近隣関係が希薄な場所が混在していることが指摘された。高齢化が進む地域では、持ち回りの自治会役員の仕事が独居高齢者の負担となっている状況など、これまで地域を支えてきた地域資源に変化が生じつつあることが語られた。

高齢者自身の状況としては、テレビや新聞、編み物や碁などの趣味を楽しみに毎日生活している様子が語られた。心配事としては[（つれあいが）転倒しないかと心配でこわい][いつ、また、倒れるかね][糖尿病と長く付き合っている][以前、出来ていたことが出来なくなることが不思議]など、自分やつれあいの体の様子に関連して多くの発言がなされ、老いや不自由なところや病気とつきあいながら生活している様子が見受けられた。生活上の困難としては、[おかずくらい何とかね、長く立ってられないから簡単なものを作る][だんなが亡くなってからは自分が食べるだけだから、簡単に済ます]など食事の準備が大変である様子が語られた。独居高齢者からは[いつ発作で倒れるかわからない][倒れても誰にも気がついてもらえないのではないかな]など、急変時の不安や、日常的にかかわる相手の少なさを嘆き心配する発言が共通して聞かれた。

高齢者の**夫婦間の関係**は、[お互い助け合っている、まあ喧嘩もするけど安気がいいよ][連れ合いが倒れないか心配]など、お互いが病や老いをいたわりながら、男女に関係なく、それぞれの心身の状態に応じて家事等の役割を分担し、支えあいながら生活している様子が表現されていた。夫婦の間での思いや気持ちを表現することが大切であることは、夫婦世帯の方々から共通して聞かれた事柄であり、特に感謝の気持ちを言葉にして表現することが大切であるとの認識が示されていた。

高齢者の**別居の子どもたちや親戚との関係**は、[子供でも、女の子の方が頼りになる][気遣いがね、やっぱりね男の子と女の子じゃ違うかもしれない][娘が頼り]など、娘との関係が強い様子が表現されていた。子どもたちや親類縁者もそれぞれの生活があり、出来る限りは自分たちで何とかしたいと思いつつも気配りや目配りをはじめとして、生活上のサポートに対して「ありがたい」という思いが表現された。

隣近所との関係については、〔（近隣に）男の人がほとんど居ない〕〔（隣近所で）話があう人がいない〕など、地域のつながりが薄れつつある様子が伺える発言がみられた。隣近所のつきあいが続いてきた地域においても、同世代の住民が亡くなり、その子や孫の世代へと移り変わっていくプロセスにおいて顔なじみがへり、つながりが薄れつつある様子が窺える。その一方で〔お互いに出ないからね。無尽のときだけ行き会う〕という、無尽を通じた交流は残っている様子が表現されていた。

高齢者を支援する住民組織としては、民生委員、高齢者クラブ、町内会、消防団などがある。住民組織の担い手自身も高齢者が占める割合が多く、〔なんでも役所に頼るのではなく、自分たちで何とかしないといけない〕など、助ける、助けられるという一方通行の関係性でなく同じ地域に住むもの同士が「支えあう」姿勢も重要だという発言がなされた。

民間を含む高齢者支援団体としては、病院、居宅介護支援事業者（ケアマネージャー）、居宅介護事業者（デイサービス）、訪問介護（ホームヘルパー）、訪問看護、公共交通機関（バス・タクシー）などがある。デイサービスが休みになる土曜日に事業所のスペースを地域住民の活動に提供する、災害時は一時避難場所としての機能をもつ、など、営利活動以外でも積極的に地域とかかわり、貢献する姿勢や、バス停の設置場所などで沿線住民の直接の意見を反映させるしくみなどが見られた。高齢者からの発言としては〔家にいるより楽しい〕〔（デイサービスでの楽しみは）会話だね、やっぱしね〕デイサービスなどの福祉サービスをうまく活用し楽しんでいる様子が表現され、特に独居高齢者の場合はバランスの取れた食事や、他者と会話し交流する貴重な機会となっている様子が窺える。家族を別にすれば現在の支え手としての中核を成しているのはこういった民間の高齢者支援団体である、といえる。その一方で〔介護１の時は、これもあれも使えますよって言ってくれた。で、今になって何にもダメですよって言われたら「あれまあ」と思う。私矛盾しているねって言うの〕という、制度の変更やそれに対する説明不足、融通のきかなさを嘆く発言も聞かれた。

行政の高齢者支援については、ふれあいペンダントという消防署と連携した緊急通報システムの貸し出しなどを実施している。行政としても予算的な制約があるが、地域住民から具体的な提案があがることでそれに対応する施策を実行できるとの発言がきかれた。前述のふれあいペンダントの例でいえば、設置にあたっては３名の協力員を申請する必要がある、協力員の引き受け手を確保する難しさも語られた。

(2) 高齢者支援ネットワークの課題

B市における聞き取り調査と高齢者支援組織との交流会において交わされたさまざまな意見から、地域の抱える課題をいくつか提示する。

一つ目は、「当事者自身の地域の中でのつながり」についてである。今回の聞き取り調

査では、高齢夫婦や高齢独居者が、自分で出来ない部分を連れ合いや地域の資源でうまく補いながら生活を維持している様子に触れることができた。病や生活の不自由さを持ちつつも、それぞれのできることを精一杯行い、それでも不足してくる部分に上手にサービスや地域の方の助力を得る絶妙のバランス感覚を発揮していた。同時にそれは、現在の生活を支える要素がひとつでも欠けた場合、即座にバランスが崩れ、現在の生活が維持できなくなる可能性がある、ということでもある。聞き取り調査の中でも「病気の時どうしたらよいか」「夜に発作が起きたら、誰にも気づいてもらえない」などの不安が語られ、調査者として話を聞きながら「病状が進んだら在宅生活は厳しいだろう」「どちらかが亡くなったたら、今の生活は維持できないだろう」と感じる場面もあった。身近な頼れる存在がいなくなったとき、出来ていたことが出来なくなったとき、などのバランスを崩す要因に対してどれだけ早く対応がとれるかは、支援が必要になる以前からの日常のなかで「どんな人たちとつながっているか」に大きく左右される。これまでは比較的濃密な地域のつながりが生きていて、隣近所での助け合いによって特に意識しなくてもだれかとつながっていることができていた。しかしそのつながりは社会情勢や生活スタイルの変化によって昔ながらの形では存続できない状況となっている。一方的に支援を受けるのではなく、当事者として「一日一回でいいから、隣の一人暮らしの安否を気遣う」「自分たちのことは自分たちで」「老人の一人暮らしの方もお互いに助け合いの精神を高める」ということを意図的に行って、意識してつながりをつくる、ということがなにかアクシデントが生じてバランスが崩れたとしても、日常のつながりのなかから支えを得ることができ、地域での生活を長続きさせる大きな力となる。それには一方的な支援の受け手としてではなく、見守る、声をかける、など無理なく出来る部分で主体的当事者として「つながり」に参加することが必要となる。夫婦が支えあうように、高齢者だから一方的に支援を受けるのではなく、それぞれのできることをできる範囲で提供する、相互の助け合い、補い合いを意識的に行うことが、これからの高齢者自身の持つ課題といえるのではないだろうか。

二つ目は、「支援者のつながりをどう形成していくか？」についてである。支援ネットワークを考えると、地域のリーダー役や中心になる人材や組織がない、という指摘がされる場合が多い。今回の交流会においても、これまでの地域のネットワークを担ってきた町内会などの住民組織が、その束ね役や参加者への負担の増大によって従来の形では活動しにくくなっていることがうかがえる。今後は従来のネットワークに加えて、介護保険など公的サービスを中心とした新たなつながりの枠組みが必要とされていることを感じる。B市の状況からは特定の個人が地域のまとめ役となるということは、その個人にかかる負担が大きく、困難なのではないかと想像される。しかしその一方で、地域の高齢者を支えようという意思と力をもった人材の幅広さと豊かさも、同時に感じるところである。その豊かさを活用しようとするとき、誰かが束ね役を買って出るのを期

待するのではなく、まずはそれぞれの役割をスムーズに果たせるようにすることが重要ではないかと考える。その第一歩として、地域で生活する一人一人が、地域で活動する一人一人が、地域の中でお互いに「顔売る」ということの重要性を強く感じる。高齢者自身が周りの住民に顔や名前を見知ってもらい、というだけでなく、ケアマネジャーが、地区担当の民生委員が、町内会長が、地域包括支援センターの職員が、それぞれがお互いの役割と得意分野を把握し、こういう時は誰々の出番、という共通認識ができれば素早い初動と継続的な支援が地域のなかで可能になる。特定個人でなく、地域の支援者の集合体それぞれの役割に応じて中心となり、周りがそれを支えることで支援ネットワークが形成され、有効に機能していくのではないだろうか。

今回の調査を通じて強く感じたのは、地域で生活する高齢者も、それを支える人も、それぞれが連携する相手を捜し求めている、ということである。地域内には実はたくさん志や、役割や、特技を持った人材や組織が存在している。それらが点々とちらばって、つながる相手を求めているというのが今の状況ではないだろうか。大掛かりな仕組みや支援よりも、まずは集い、顔を合わせる、そんなきっかけが重要であると考え。小回りの利くできるだけ身近な単位で、その地域のなかで「点」と「点」がつながれば、「線」としてその接点にあたる人たちの支援が可能になる。何本かの線がつながれば「面」となって支援が広がっていく。例えば日常レベルで挨拶をする、定期的に顔をあわせて見守りあうなどは点と点をつなげる試みに、民生委員の改選時期にその担当範囲内の支援者が集って情報を共有しお互いの顔売る、制度の改変が行われるときには町内会単位で説明会を実施し、範囲内の居宅介護支援事業者が場所を提供し、行政や地域包括支援センターの職員が説明をおこなう、などは線と線をつなげる試みとなるであろう。さらには行政や医療・福祉の専門職が俯瞰的な視点からサポートし、子どもから大人まで様々な人が関わっていくことが出来れば立体的な支援ネットワーク構築につながっていくのではないだろうか。

IV. まとめ

本研究では、高齢者が住み慣れたまちで最期まで安心して暮らし続けることを可能にするための高齢者支援ネットワーク構築の課題を明らかにすることを目的とし、今回は、年々増加傾向にあり、かつ自立した生活を送るためには周囲からの支援を必要とする頻度の高いひとり暮らし・夫婦世帯高齢者に焦点を当てた。Y県下の人口過疎地（A町）および市街地（B町）を取り上げ、両地区に居住するひとり暮らし・夫婦世帯高齢者の生活実態および現在および今後の生活に対する高齢者本人の思いを明らかにするとともに、これら高齢者の生活を、地域でさまざまな側面から支援しているフォーマル・インフォーマル支援組織との交流会を開催し、過疎地ならびに市街地の高齢者支援ネットワークをめぐる現状と課題について検討した結果、以下のことが明らかになった。

1. ひとり暮らし・夫婦世帯高齢者の現在および今後の生活に対する思い

過疎地（A町）に居住する高齢者は、盆や正月など1年の節目行事の際の別居子の帰省や、毎日の生活における近隣との交流を楽しみにしながら生活していた。その一方、1年毎に加齢変化を自覚し、今元気でもいつどうなるか分からないという健康への不安、日々の暮らしや災害等に対する心配や悩みを抱えていた。しかし、いざという時には別居子や近隣などの支援があるから安心だという思いをもち、自分なりの保健行動と生きていく上でのこころがまえを持ち、大好きな百姓をしながらここ（A町）に最期まで住み続けたいという思いを持っていた。

市街地（B市）に居住する高齢者では、同世代住民の死亡により顔なじみが減り、近隣のつながりが薄れていることを実感しつつも、「無尽」を通じた交流は残存し、テレビや新聞、編み物、囲碁等の趣味を楽しみとして生活していた。また、過疎地の高齢者と同様、加齢変化を実感し、老いや病の急変時の不安を感じながらも、自分なりの保健行動をとりながら生活していた。別居子や親類縁者との関係を大切にしつつも、できるだけ自力で対処したいという思いを持っていた。

2. 高齢者支援ネットワークの現状

1) 高齢者自身の状況

過疎地（A町）に居住する高齢者は、百姓を生きがいとし、ここ（A町）での生活をずっと続けたいという思いをもつ一方、加齢に伴う健康への不安を感じ、それなりの保健行動をとりながら生活していた。災害、交通機関の不便さ、近所に段々人がいなくなること、空き家が沢山あること、村の行事への負担など、ここ（A町）で好きな生活をするにあたって様々な不安や悩みを抱えていた。

市街地（B市）に居住する高齢者は、テレビや新聞、編み物などの趣味を楽しみに生活

していた。心配事としては夫婦世帯の場合、自分や配偶者の身体への心配、生活上の困難としては、日々の食事の支度が大変であること、またひとり暮らし高齢者では急変時の不安や日常的にかかわる相手の少なさを嘆き心配する発言が共通して聞かれた。

過疎地、市街地の両地域高齢者の共通点は、内容は若干異なるものの、それぞれ自分なりの生きがいや楽しみをもちながら生活していること、加齢に伴う健康への不安をもっていたが、自分なりの保健行動をとるなどのセルフケア能力の高さが窺えた。さらに、過疎地、市街地とその状況は異なるものの、近所に同世代の住民が居なくなり顔なじみが減り、繋がりが薄れつつあることへの不安を両者とも抱えていた。

2) ネットワークの現状

過疎地（A 町）では、高齢者を中心として、家族、近隣住民、住民組織、高齢者支援団体、行政と、同心円状に支援ネットワークが形成されていた。中でも特徴的なのは、高齢者を取り巻く近隣住民の支援ネットワークが活きていることであった。また、家族・住民を支援の中心としながら、高齢者支援団体、行政はそれぞれの立場で、住民と共に高齢者を支えていた。

一方市街地（B 市）では、同じ B 市の C 地区内でも、人口動態や生活状況の差が大きく、新興住宅地が多く比較的若い世代が多い地区、戦前から居住している住民が多く独居や夫婦世帯の高齢者が多い地区など、同じ C 地区内でも状況が大きく異なり、古きよき近所づきあいが生きている地区や、近隣関係が希薄な地区が混在していた。高齢化が進む地域では、持ち回りの自治会役員の仕事が独居高齢者の負担となっている状況など、これまで地域を支えてきた地域資源に変化が生じつつあることが窺えた。住民組織の担い手自身も高齢者が占める割合が高く、今後は、「助ける」、「助けられる」という一方通行の関係でなく、同じ地域に住む者同士が相互に支え合う姿勢が重要であるとの発言もあった。また、市街地（B 市）では、交通の利便性がよいため、介護保険や行政、インフォーマル組織による保健福祉の諸サービスの効率的な運用により、利用者側のメリットに繋がる可能性の大きいことが交流会の場でも確認された。

3. 高齢者支援ネットワークの課題

過疎地における支援ネットワークの課題として、主なものは以下の2点である。

1) 過疎地

(1) 「高齢者が自由に共同生活する場」の確保

過疎地の高齢者は「自分の家が一番いい」と言い、近隣同士で集い、話をすることを楽しみにしていた。高齢者の生活リズムやペースにあった住み慣れた自宅での“気なり”な生活を継続しつつ、ときおり仲間と集い、話をしたり趣味の活動等をする“共同生活する場”の提供ができれば、高齢者の生活の質の維持向上に繋がるものと思われる。このような、集落が点在している人口過疎地域においては、この実現のためには送迎が不可欠である。住民と行政が一体になって、相互のできることを明らかにしていくことが重要である。

(2) 「生活に関する些細な支援」の提供

行政サービスを利用するほどではない、または町全体という大規模での支援を受けるほどではない「ちょっとした手助け」が高齢者の生活の継続を可能にする。何かあったときはもちろんであるが、何もなくてもときおり“見守る”活動を実施することで地域での生活の継続が可能となる。“住民全員みんなヘルパー”といった相互扶助の精神を、子どもの頃から住民一人ひとりが持てるような取り組みが重要である。

2) 市街地

(1) 当事者自身の地域の中でのつながり

市街地に居住する高齢者は、病や生活の不自由さを抱えながらも、自分に欠落している部分は諸サービスを上手に使い、また他者の助力を得るという絶妙なバランス感覚を持ちながら生活していた。しかし、ひとたびバランスが崩れたときは、地域での日頃の自身のネットワークに左右される。したがって、一方的に支援を受ける立場でなく、当事者として日常の繋がりを意識的に作っておくことにより、バランスを崩したときは周囲の支援を得ることができ、住み慣れた地域での生活を継続させることができる。このように、高齢者は一方的な支援の受け手ではなく、見守り、声かけなどの自分にできる部分で日頃から地域との「つながり」に参加していることが重要である。

(2) 支援者のつながりをどう形成していくか

地域でこれまでのネットワークを形成し、支援してきた町内会などの住民組織は、参加者自身への負担増大によって従来の形では活動が困難になってきている。したがって、高齢者が多い地域では特定の個人がまとめ役になるのではなく、個々の役割をスムーズに果たせるようにするため、ネットワークに属する人々がお互いに地域の人的資源をアセスメントし、出番を決めていくという共通認識が不可欠である。これにより素早い発動と継続的支援が地域の中で可能となり、ネットワークが形成され有効に

機能していくと思われる。まずは、集い、顔を合わせる、そんなことがきっかけで「点」と「点」が繋がり「線」となり、その接点にあたる人達の支援が可能となり、さらに何本かの線が繋がれば「面」となって支援が広がっていく。したがって、市街地におけるネットワーク形成には、まず、集い、顔を合わせることから始めることが重要である。

以上、過疎地ならびに市街地の高齢者支援ネットワークの課題についてまとめた。

既述のように、過疎地、市街地にかかわらず、後期高齢者になると誰しも加齢変化により心身の機能が徐々に低下し、多かれ少なかれ周囲からの支援を必要とする時期がくる。また高齢になればなるほど、周囲に顔見知りが減っていくという現実や子ども達は他市町村に居住し、物理的な距離があることなどは、過疎地、市街地両者の共通点であった。しかし、過疎地では、その地域特性から、高齢者が共同で集う場の確保と送迎、および日常生活における“些細な支援”があることで住み慣れたまちに住み続けることが可能となることが明らかになった。市街地では、日頃から地域の人々と顔見知りになり、まだ元気なうちから、支える、支えられるという一方通行の関係でなく、相互に支え合う姿勢の重要性が示唆された。今後は、得られた成果をふまえ、過疎地ならびに市街地の高齢者支援ネットワークの構築に向けて研究を進めていきたい。

謝辞

本研究実施にあたり、多大なご協力をいただきました A 町および B 市 C 地区の高齢者の皆様、ならびに両地域包括支援センタースタッフ、交流会にご出席くださった皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 高齢者介護研究会：2015 年の高齢者介護－高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて－，法研，80，2003
- 2) 内閣府：平成 18 年度版高齢社会白書，20，2006
- 3) 山梨県：平成 18 年度高齢者福祉基礎調査概要，3-4，2006
- 4) 前掲書 2)，21
- 5) 前掲書 3)，10

参考文献

- 1) 郷洋子、山岸春江：山間地域に居住する独居高齢者の人との交流・外出状況の実態，山梨県立看護大学紀要、Vol. 7、9-18、2005
- 2) 鳩野洋子：これからの高齢者保健活動に必要な視点，保健師ジャーナル Vol. 63No. 8、692-695、2007
- 3) 本田亜起子、斉藤恵美子、金川克子、村嶋幸代：一人暮らし高齢者の特性-年齢および一人暮らしの理由による比較から-，日本地域看護学会誌、Vol. 5No. 2、85-89、2003
- 4) 藤田幸司、藤原佳典、熊谷修、渡辺修一郎、吉田祐子、本橋豊、新開省二：地域在宅高齢者の外出頻度別にみた身体・心理・社会的特徴，日本公衆衛生学会誌、第 51 巻第 3 号、168-179、2004
- 5) 石川隆志、湯浅孝男、本橋豊：秋田市在住の独居高齢者の生活リズムと生活実態-非独居高齢者との比較から-，秋田大学医学部保健学科紀要、14(2)、47-53、2006
- 6) 君島菜菜、冷水豊、石川久展、山口麻衣：在宅高齢者ケアにおける未充足ニーズの分析-新しい分析枠組みの提案とその活用-，日本の地域福祉、第 18 巻、25-32、2005
- 7) 長江弘子、千葉京子、中村美鈴、柳澤尚代：生活障害をもちながら地域で暮らす一人暮らし女性高齢者に関する研究-「生活の折り合い」の概念構造-，日本地域看護学会誌、Vol. 3No. 1、123-130、2001
- 8) 岡本秀明、岡田進一、白澤政和：大都市居住高齢者の社会活動に関連する要因 身体、心理、社会・環境的要因から，日本公衆衛生学会誌、第 53 巻第 7 号、168-179、2006
- 9) 大野絢子、矢島まさえ、深川ゆかり、錦織正子、小泉美佐子、藤野文代：一人暮らし老人の日常生活を支える条件-一人暮らしの動機別比較-，日本地域看護学会誌、Vol. 1No. 1、85-89、1999

- 10) 大森純子：高齢者にとっての健康：『誇りをもち続けられること』農村地域におけるエスノグラフィーから，日本看護科学会誌、24 巻 3 号、12-20、2004
- 11) 佐藤至英、戸澤希美：独居高齢者のストレスと QOL との関係，北方圏生活福祉研究所年報、第 9 巻、39-45、2003
- 12) 高橋（松鶴）甲枝、井上範江、児玉有子：高齢者夫婦二人暮らしの介護継続の意思を支える要素と妨げる要素-介護する配偶者の内的心情を中心に-，日本看護科学会誌、26 巻 3 号、58-66、2006
- 13) 高橋和子、小林淳子：高齢者夫婦世帯における介護者のインフォーマルサポートの実態と精神的健康の関連，老年看護学、Vol. 8No. 1、5-13、2003
- 14) 高橋和子、太田喜久子：都市部と農村部における高齢者の地域ケアシステムに関するニーズとその傾向，老年看護学、Vol. 6No. 1、50-57、2001
- 15) 田中昭子、小西美智子：ひとり暮らし虚弱高齢者の在宅生活継続の対処方法，老年看護学、Vol. 8No. 2、63-72、2004
- 16) 當山富士子、戸田圓二郎、田場真由美：へき地山村に居住する独居高齢者の“生活の術”-参与観察で把握した生活実態から-，沖縄県立看護大学紀要、第 4 号、79-85、2003
- 17) 和久井君江、田高悦子、真田弘美、金川克子：大都市部独居高齢者の抑うつとその関連要因，日本地域看護学会誌、Vol. 9No. 2、32-36、2007
- 18) 渡邊裕子、嶋田えみ子、前田志名子、大坪亜矢、筑後幸恵、流石ゆり子：老年者のひとり暮らし継続の要因その 2 -市内中心部と郊外地区の比較-，山梨県立看護大学短期大学部紀要、第 4 巻第 1 号、15-23、1999
- 19) 渡邊由美子：高齢者の活躍で「安らぎと安心に満ちた支え合う暮らし」をつくる，保健師ジャーナル Vol. 63No. 8、678-682、2007
- 20) 渡邊裕子、内藤理英、流石ゆり子、嶋田えみ子：手段的 ADL の視点からみた老年者のひとり暮らしの継続要因，山梨県立看護大学短期大学部紀要、第 3 巻第 1 号、27-35、1998
- 21) 柳川育子：判断能力が衰え、要介護状態にある独居高齢者の地域生活支援-成年後見制度の「身体監護」を中心にして-，京都市立看護短期大学紀要、第 31 号、61-67、2006

資 料

少子高齢化時代の地域ネットワークに関する研究（Ⅲ）
－ひとり暮らし・高齢者夫婦世帯に焦点をあてて－
の調査協力について（依頼）

猛暑の候、本学の教育・研究につきましては、平素は格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

私どもは、本学の3学部教員を構成メンバーとする地域研究交流センターのプロジェクト研究として『少子高齢化時代の地域ネットワーク』のテーマの基に、平成17年度より研究に取り組んで参りました。近年、人口の急速な高齢化により高齢者人口割合は年々増加し、戦後生まれのいわゆる“団塊の世代”が65歳以上になりきる2015年までの高齢者人口は今後急増することが見込まれております。中でも75歳以上の後期高齢化率の急激な伸びと、後期高齢者ではその健康特性から、現在健康であっても些細なことがきっかけで要介護の状態に陥りやすく、また認知症の発生率も高くなることが報告されています。

一方、わが国では核家族化、少子化、女性の社会進出、および配偶者との死別後も子どもと同居しない者の増加などにより、ひとり暮らしや高齢者夫婦世帯が増加しています。これらの傾向は本県においても同様の状況にあります。健康な高齢者でも、人間の身体機能は、後期高齢者の仲間入りをする75歳を境に急激に低下すると言われております。したがって、75歳以上のひとり暮らしや夫婦世帯の高齢者が住み慣れた地域で生活し続けるためには、支援システムのネットワーク化が不可欠であると思われます。

そこで本研究では、2年間の研究成果をふまえ、ひとり暮らしや夫婦世帯の高齢者に個別にインタビューおよび録音をさせていただき、生活実態ならびに現在および今後の生活に対する思いなどを明らかにし、高齢者支援ネットワーク構築のための資料を得ることを目的としました。

研究への協力につきましては、高齢者個々に文書と口頭で分かりやすく説明させていただき、ご本人の自由意思を尊重いたします。また、個人名は特定できないようにするとともに、得られた結果は研究以外では使用いたしませんので、貴センター管轄地域内の候補者の選定およびインタビューの仲介につきまして格段のご配慮をよろしくお願いいたします。

なお、本研究に関するお問い合わせは、下記までお願いいたします。

平成19年〇月

県立大学地域研究交流センタープロジェクト研究
『少子高齢化時代の地域ネットワークに関する研究』

代 表 流石ゆり子

副代表 小野 興子

メンバー 林正 健二 村松照美 河野由乃

郷 洋子 藤巻尚美

横山貴美子 城戸裕子 伊藤健次

波木井 昇

高齢者のみなさまへ（聞き取り調査へのご協力のお願い）

残暑の候、皆様におかれましては、日々お元気でお過ごしのことと存じます。

私どもは、山梨県立大学地域研究交流センターのプロジェクト研究として『少子高齢化時代の地域ネットワーク』をテーマに平成 17 年度より研究に取り組んで参りました。

わが国では高齢社会を迎え、また様々な社会の変化によって、皆様のようにひとり暮らしやご夫婦だけで生活している方が増加しています。これらの傾向は本県においても同様の状況にあります。

健康な状態であっても、人間のからだの働きは、後期高齢者の仲間入りをする 75 歳位を境に急激に低下すると言われております。したがって、皆様方のような、現在お元気な方が、住み慣れた地域での生活を長く続けられるには、ご家族やとなり・近所の支え合いや行政などの支援が不可欠であると思われまます。

そこで本研究では、現在ひとり暮らしをされている方やご夫婦世帯の皆様に関別インタビューおよび録音をさせていただき、現在の生活の様子や今後の生活に対する思いなどを伺い、地域にどのような支え合いの仕組みがあればよいのかを考えていくための資料にしたいと考えました。

研究への協力につきましては、分かりやすく説明させていただき、皆様の自由意思を尊重いたします。また、個人のお名前が特定できないようにするとともに、得られた結果は、目的以外では使用いたしませんので、ご協力をよろしくお願い致します。

なお、本研究に関するお問い合わせは、下記までお願いいたします。

平成 19 年 8 月

県立大学地域研究交流センタープロジェクト研究
『少子高齢化時代の地域ネットワークに関する研究』

代 表 流石ゆり子

副代表 小野 興子

メンバー 林正 健二 村松照美 河野由乃

郷 洋子 藤巻尚美

横山貴美子 城戸裕子 伊藤健次

波木井 昇

連絡先：県立大学看護学部 老年看護学

藤巻 尚美

TEL：055-253-7831（直通）

高齢者のみなさまへ（聞き取り調査へのご協力のお願い）

残暑の候、皆様におかれましては、日々お元気でお過ごしのことと存じます。

私どもは、山梨県立大学地域研究交流センターのプロジェクト研究として『少子高齢化時代の地域ネットワーク』をテーマに平成17年度より研究に取り組んで参りました。

わが国では高齢社会を迎え、また様々な社会の変化によって、皆様のようにおひとり暮らしやご夫婦だけで生活している方が増加しています。これらの傾向は本県においても同様の状況にあります。

健康な状態であっても、人間のからだの働きは、後期高齢者の仲間入りをする75歳位を境に急激に低下すると言われております。したがって、皆様方のような、現在お元気な方が、住み慣れた地域での生活を長く続けられるには、ご家族やとなり・近所の支え合いや行政などの支援が不可欠であると思われまます。

そこで本研究では、現在ひとり暮らしをされている方やご夫婦世帯の皆様にご個別にインタビューおよび録音をさせていただき、現在の生活の様子や今後の生活に対する思いなどを伺い、地域にどのような支え合いの仕組みがあればよいのかを考えていくための資料にしたいと考えました。

研究への協力につきましては、分かりやすく説明させていただき、皆様の自由意思を尊重いたします。また、個人のお名前が特定できないようにするとともに、得られた結果は、目的以外では使用いたしませんので、ご協力をよろしくお願い致します。

なお、本研究に関するお問い合わせは、下記までお願いいたします。

平成19年8月

県立大学地域研究交流センタープロジェクト研究
『少子高齢化時代の地域ネットワークに関する研究』

代 表 流石ゆり子

副代表 小野 興子

メンバー 林正 健二 村松照美 河野由乃

郷 洋子 藤巻尚美

横山貴美子 城戸裕子 伊藤健次

波木井 昇

連絡先：県立大学人間福祉学部

福祉コミュニティ学科 教授 小野興子

TEL：055-224-5371(直通)

同意書

私は、「少子高齢化時代の地域ネットワークに関する研究(Ⅲ)―ひとり暮らし・高齢者夫婦世帯に焦点をあてて―」の研究について研究の目的、内容、方法及び倫理的配慮等について、研究者より文書を用いて十分な説明を受け、理解いたしました。

そこで、私の自由意思にもとづいてこの研究に参加することに同意します。

日付:平成 年 月 日

参加者(署名) _____

研究者(署名) _____

* 立会人／代諾者(署名) _____

(本人との関係) _____

(立会人／代諾者の署名理由) _____

A 町高齢者支援組織交流会

住み慣れたまちで安心して暮らせるための 地域支援ネットワーク

～ひとり暮らし・高齢者夫婦世帯に焦点をあてて～

日 時：平成 19 年 12 月 13 日（木）午後 3 時～午後 4 時 30 分

場 所：A 町総合福祉センター

参加者：A 町高齢者支援住民組織代表

（民生委員、老人クラブ、愛育会、食生活改善推進員会 等）

A 町高齢者支援団体

（老人保健施設、居宅介護支援事業者、社会福祉協議会 等）

A 町役場関係職員

県立大学プロジェクト研究 少子高齢化 G メンバー

内 容：・ A 町の概況説明

・ A 町の高齢者へのインタビュー結果紹介

・ 交流会 ～わたくし達になにができるか～

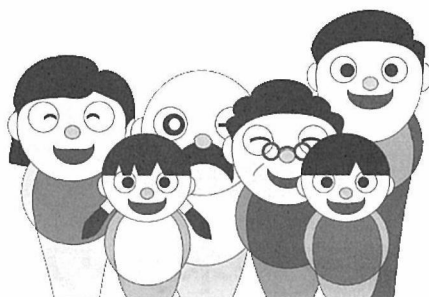
・ まとめ

主催：山梨県立大学地域研究交流センター

お問い合わせ：055-253-7831（藤巻）

B市C地区高齢者支援組織交流会

住み慣れた地域で安心して暮らせるための支援ネットワーク



少子高齢社会の現在、地域で暮らすためには何が大切でしょうか。

昨年、ご協力いただいたB市C地区での「ひとり暮らし・夫婦高齢世帯」の皆様のインタビュー調査の結果のご報告を踏まえて、地域で暮らすことの意味を共に語りましょう。

今まで気付かなかった支援や私たちに出来ること、大切にしたいことに気付くかもしれません。

日 時 : 平成20年2月19日(火) 15:00~17:00 受付 14:30~

場 所 : 山梨県立大学 飯田キャンパス 6F サテライト教室(地図参照)

参加者 : B市地域包括支援センターC(保健師)、介護老人福祉施設職員(通所サービス担当)、訪問介護員、介護支援専門員、B市高齢者支援担当職員、B市社会福祉協議会職員、地区民生委員、地区自治会長、地区老人クラブ会長、
県内高齢者介護関係企業、交通関係企業
県立大学地域交流支援センター少子高齢化研究メンバー 等

内 容 :
・ B市C地区の概況説明
・ B市C地区「ひとり暮らし・夫婦高齢世帯」のインタビューより
・ 交流会 ~私たちにできること~
・ まとめ

主 催 : 山梨県立大学 地域交流支援センター
甲府市飯田5-11-1 飯田キャンパス TEL 055-224-5261 (代表)

連絡先 : (お問い合わせ)

TEL・FAX : 055-224-5371(小野研究室)

E-mail : kono@yamanashi-ken.ac.jp

(ご参加くださる方は、

人間福祉学部 小野まで

ご連絡ください。当日参加も歓迎します)

